

せい か ほう まさ  
星 火 方 正

ほうまさ  
～燎原の火は方正から～

ホ マ ラ ニ ス モ  
国際主義を超えてHOMARANISMOを！

—K・マルクスからL・ザメンホフの人類主義へ—

「満蒙開拓平和記念館」の開館を迎えて

たったひとつの願い～「満洲」から故郷日本へ帰って～

“馴染みの地”になった方正

史実を学び、伝えたい

わたしの方正之路 ①気まぐれ天気の逆襲 今年の日中花見の宴

大類 善啓

寺沢 秀文

瀬瀬 代美子

吉川 雄作

松島 赫子

奥村 正雄



方正名物！ の三輪タクシー、時に児童の送迎用に契約していることもあるとか  
(自由市場すぐそばの通り、松花江街で)

### なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちが彼らの思いを受けて、会の名称を「方正友好交流の会」とした。<sup>ほうまさ</sup>

### なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

# 星火方正（第16号） ～燎原の火は方正から～

## 目次

国際主義を超えてHOMARANISMOを！ — K・マルクスからL・ザメンホフの人類人主義へ—	大類 善啓	1
「満蒙開拓平和記念館」の開館を迎えて	寺沢 秀文	5
「満蒙開拓平和記念館」関連記事転載	編集部	9
たったひとつの願い ～「満洲」から故郷日本へ帰って～	額瀬 代美子	11
“馴染の地”になった方正	吉川 雄作	18
史実を学び、伝えたい	松島 赫子	21
わたしの方正之路 ①気まぐれ天気の逆襲 今年の日中花見の宴	奥村 正雄	23
石さんの特約情報 .....	石 金楷	28
満州事変の導火線「中村大尉殺害事件」 .....	高橋 健男	30
稲作で日中の懸け橋 藤原長作 方正	読売新聞	41
《お知らせ》		
第5回 近現代の歴史検証の旅 方正友好交流の会 一般社団法人日中科学技術文化センター		42
ハルピン氷祭りの旅（2014年） 方正友好交流の会 氷祭りツアー班 .....		43
——「方正友好交流の会」へのお誘い——	編集部	44
書籍 『中国のお笑い』他 報告 編集後記	編集部	45



# 国際主義を超えて<sup>ホマラニスモ</sup>HOMARANISMOを！

—K・マルクスからL・ザメンホフの人類人主義へ—

大類 善啓

領土問題を契機に政府レベルの日中関係が冷え込んでいる。一部、日本に存在する嫌中感情も広がっているように見える。しかしやっとなここに来て、感情的な論調や雰囲気は減少しているようである。日中双方の心ある人たちが「理性的に行動しよう」と呼びかけた効果もあるだろうが、ある一定の時間が経てば、熱しやすく醒めやすい感情的な心模様が変わってきたのだろう。感情的な雰囲気は消え去るものなのである。

## 「わが国固有の領土」なる欺瞞

とは言え、とても気になったのは、この間の日中双方の政府高官レベルに見られる「わが国固有の領土」というフレーズである。この言葉を聞くたびに、この世の大地に対する不遜な言い方だと思った。

そもそも論議の前提になっている「日本」にしる「中国」にしる、このような「国民国家」なる概念はたかだか、100年ほど前になって初めて出てきた考えである。日本についていえば、それ以前は、薩摩であり肥後であり長州という「藩」という概念に支配され、人々は自分を日本人とは捉えようとしてもそういう発想など全くなく、自分は薩摩の人間であり長州人だと思っていて、そう公言していた。

それ以前はどうだったか。はるか2000年前、「わが日本」なるものはなかった。例えば、「わが国への稲作技術の到来」というような歴史の教科書の記述などを読んだり聞いたりするたびに、当時の人々にとって、そこが「日本」であり、彼の地は「中国」だったろうか。そんな「国」はありもしなかったのである。

ユニークな歴史家である網野善彦によれば、「日本」という名前が登場するのは、8世紀初頭に勢力を振るっていた一族が本州の西南部や九州の北部をめぐる領土の支配を確立した時のことのようなものである。その最高権力者が「天の王」を意味する天皇という称号を与えられた。要するに、「日本」とはある特定の一族によって支配された政治的な単位だった。

そういう観点をしっかりと持っていれば、「国民国家」概念が存在する以前、どこの海であろうと、異なる言語を話す近隣の漁民たちは時に争うことはあっても、おのずと共存しながらお互いに漁を釣って生活の糧にしていたと想像できるはずである。長期的な視点に立てば、いわゆる領土問題などもおのずと「共同開発して共に利益を享受しよう」という考えに到達できるだろうし、それこそが平和的な解決方法だと認識できるだろう。

## 人民日報から消える「国際主義」

紆余曲折を経ながら今日言うところの「国民国家」概念が生まれ、領土問題も発生してきた。

現在、冷静になってきたとはいえ、日中双方の政治家レベルによる「わが国固有の領土」

という発言が頻繁に出てきた時、国交正常化以前から日中友好運動に携わってきた人々の中から、「今こそ、軍国主義と日本人民を区別した周恩来総理の教え」に帰るべきだとの声が出てきた。

周恩来は周知のように、方正日本人公墓建立を許可するよう英断を下した人である。そうして常に、日本の軍国主義と日本人民を区別するよう人々に指導していた。

ところが現在の中国政府は、そのような区別などはせず、日本政府に反対することが即、「日本」そのものに反対するという発想になり、それが反日感情を爆発させる方向に転じる要因の一つになっている。

周恩来の秘書をしていた人が NHK・BS で放送された『家族と側近が語る周恩来』という番組でこんな回想をしている。周恩来がソビエトの友人と話をした時、アメリカ帝国主義と発言したが、その人は「アメリカ人」と通訳してしまった。すると周恩来はすぐさま「アメリカ帝国主義とアメリカ人は違う」と発言して通訳の誤りを訂正した。それだけ周恩来はどのような政府とも、その国の国民との違いを区別した。

しかし周恩来が亡くなり、鄧小平もいなくなった今日、とりわけ江沢民が主席として登場以降、「国際主義」なる言葉はついで中国から消えてしまった。横浜国立大学名誉教授の村田忠禧氏が過去数十年に亘って「人民日報」の社説に出てくる単語の頻出度を調査したところ、「国際主義」という言葉は年毎に減り、それに代わって「愛国主義」なる言葉が頻繁に表れるようになったという。ここ 10 年は、国際主義という言葉がほとんど消えてしまったと慨嘆している。(詳しいデータは氏の HP をご覧いただきたい)

そうして今、中国政府は世界各国に孔子学院を設立し、中国の思想や中国語（この場合、北京語を軸に成立した普通語といわれるもの）の普及に余念がない。そのこと自体は、とりたてて問題にすることはない。ただ、中国国内において少数民族の言語が軽視されることはあってはならないだろうと思う。

日本について言えば、安倍総理は、教育の基本に国を愛する考えがなければいけないような趣旨を語っている。そんなことを言うぐらいなら、イギリスやアメリカ、中国に見習って、日本語がたやすく学べる施設を世界の主要都市に設ける方に力を注いだ方がいい。そうすれば『源氏物語』から谷崎潤一郎、川端康成、大江健三郎など世界に誇る日本文学が理解される条件が整ってくるというものである。

「愛国心」などはバーナード・ショーが言うように、エゴイズムを増長するだけである。

### 言語帝国主義の壁を超え、人類人主義へ

思えば国際主義もいわば「国民国家」が前提になっている。その限界性を認識すべきではないかと思う。国際主義はもともとマルクス主義の「労働者に祖国はない」というプロレタリア国際主義から来ている。しかし現況を考えると、世界共通語エスペラントを創り民族間の争いを防ぎ平和な世界を作ろうとしたルドヴィーコ・ラザーロ・ザメンホフ (Ludoviko Lazaro Zamenhof) が唱えた Homaranismo (ホマラニスム、人類人主義)こそ、これからの世界はますます求められているのではないかと思う。

エスペラントで「ホマーロ」は人類、「アーノ」は一員を意味し、それに「イスマ」がつき「人類人主義」、つまり国家や民族を超え、あるいは捨てて、我々は人類の一員であると

いう思想である。いわば我らは地球市民の一員だと規定し行動するのだ。

近年、英語があたかも国際的な共通語であるようなイデオロギー、いわば「英語帝国主義」が跋扈し、世界共通語としての 에스ペ란토 の存在が減少しつつあるように思えるが、しかしその人類史的な意義と有用性を今こそ声を大にして言いたい。

ザメンホフは 1859 年、現在のポーランド北東部のビアリストクで生まれたユダヤ人である。当時そこはリトアニア領で、後にはロシア帝国に支配された町だった。そこでは、ロシア人、ドイツ人、ポーランド人たち、そしてイーディッシュ語を話すユダヤ人の 4 つの民族がそれぞれの言葉を話し、些細ないざこざが頻繁に起こっていた。

子供ながら、4 民族がそれぞれの言葉を発して喧嘩が絶えない状況を見ていたザメンホフは、共通の言葉があれば争いが止み、平和が訪れるだろうと試行錯誤を経ながら 1887 年、エスペ란ト語を発表した。

発行された「インテルナツィーア・リングヴォ」(国際語)のパンフレットを読んだロシアの作家、レフ・トルストイは感激し、「エスペ란トを広めることは地上に神の国を創ることであり、これこそ人類の理想」だと語った。ロマン・ローランも、「エスペ란トは人類解放の武器である」と支持したのだった。

フランスのブーローニュで世界最初のエスペ란ト大会が開かれた時、ザメンホフは『緑星旗下の祈り』という詩を発表した。しかし、当初予定していたその詩の最後の部分をフランス人たちの要求で読みあげなかったという。それは次のような詩だ。

兄弟よ、一つにまとまって手を握りなさい。 平和の武器をもって前へ進みなさい！  
キリスト教徒もユダヤ教徒もマホメット教徒も 私たちはみんな神の子です。

ザメンホフはこの『祈り』の最後の部分の削除を要求された時、あまりのくやしさに泣き出してしまったという。最終的に妥協して最後の部分を読みあげなかった。一時は、シオニズムというユダヤ・ナショナリズムに傾倒しながらも、最終的にはアラブ人を排撃することによって成立するイスラエルの存在を予感したザメンホフは、シオニズム運動と決別した。

ヨーロッパというキリスト教世界の中で、ユダヤ教徒もイスラム教徒もみんな神の子だと歌ったザメンホフ。エスペ란トは単なる言葉の一つにすぎないという意見に対して、商売や実用にしか役に立たないエスペ란トならば、ない方がましだと言いきったのもザメンホフだった。

### 英語帝国主義に抑えられた EU の 에스ペ란토 論議

1998 年の朝日新聞(大阪版・朝刊の学芸欄)によれば EU では言語問題が真剣に論議されたという。当時 EU では公用語だけでも 11 もあり、EU 本部の職員 21000 人(今だともっと多いはずだ)のうち、通訳、翻訳業務に 6000 人が当たっていて、その経費は全事務費の 3 分の 1 を占める。しかし英語の共通語化には強い抵抗があるという。

日本では二葉亭四迷、宮澤賢治、新渡戸稲造、北一輝などが 에스ペ란토 を支持した。

異色なのは出口主<sup>でぐちおにさぶろう</sup>仁三郎が強くエスペラントを支持し、今でも大本教団では熱心にエスペラントを推奨している。

またアナーキストである大杉榮は、エスペラントを学び、中国人留学生にエスペラントを教えた。当時の中国人留学生がアナーキズムの影響が強かったこともあるが、例えば、在日留学生の劉師培、何震、張継、景梅九、錢玄同らにエスペラントを教えたという。また作家では魯迅、巴金もエスペランティストだった。ちなみに巴金というペンネームは代表的なアナーキストであるバクーニンのバクとクロポトキンのキンから取ったものである。巴金はエスペラントの普及にも力を注ぎ、上海エスペラント協会の会長にもなっている。

中国ではエスペラントを世界語と言い、中華全国世界語協会があり、「El Popola Cxinio」（「人民中国」のエスペラント版）を発行している。また北京大学学長になった蔡元培は1921年、北京大学学長に就任後、エスペラントを必修科目として採用し、エスペランティストのロシア詩人であるエロシェンコを教授に迎えた。

エロシェンコは盲人の詩人だ。日本では盲人が按摩師として自立していると聞き、来日。東京・新宿の中村屋で秋田雨雀らと交流するが、社会主義者の会合に参加したなどの理由で国外追放になり、ハルピン、上海、北京を渡り歩き、魯迅と面識を得ている。

中国のエスペランティストが今、何人いるか知らないが、北京の百万庄に中華全国世界語協会の本部がある。1982年だったか、たまたま「人民中国」日本語版の編集部にいた韓美津（本会顧問・韓慶愈夫人）さんを訪ねた際看板を見つけ、韓美津さんを案内人になっていただき訪ねたこともあった。

こんなことを書いているといろいろとエスペラントのことが走馬灯のように思い出されてくる。と言っても大昔、エスペラントは少しばかりかじった程度なのである。しかし、この『星火方正』を編集し、国際主義的精神を広めようと考えていると、最近の狭隘なナショナリズムを超えるには、いわゆる国際主義ではなかなか難しいのではないかと思うようになってきた。国家を前提とする国際主義ではなく、日本人とか日本民族などを基軸に自分を考えるのではなく、あくまでも個人を単位として考えることが重要ではないか。

一人ひとりが、居住する国の国際主義者であろうとするより、ザメンホフの人類人主義、いわば地球の一員であるという考え方、生き方を志向することの方が大切ではないかと思うようになった。

まやかしの“世論調査”なるものもあるだろうが、安倍内閣の支持率が7割を超えるという、こんな嫌な日本で生きる（漫画家の小林某なら、それなら日本から出ていけと言うんだろうね）国際主義者より、国家や民族を超えてエスペランティストとして生きたいものだと思い、大昔かじったエスペラントに今、再度挑戦しているところである。

百歳を迎えた水墨画家・篠田桃紅<sup>しのだとうこう</sup>の作品を評してノーマン・トールマンは、「桃紅さんは日本人ですが、作品は日本的ではありません。いわば〈無国籍〉それが魅力です」と語っている（東京新聞2013年4月17日付け夕刊）。

故郷の文学は大切にすべきである。しかし国籍や民族などにアイデンティティーを求めるとはまったく必要はない、拘泥することはないのである。

（おおるい・よしひろ：本会事務局長）

# 「満蒙開拓平和記念館」の開館を迎えて

満蒙開拓平和記念館 専務理事  
方正友好交流の会 理事  
寺沢 秀文

## 1. 足かけ8年をかけてようやく開館へ

「方正友好交流の会」の御関係の皆様始め多くの温かいご支援等を頂きつつ建築準備を進めてまいりました「満蒙開拓平和記念館」が4月25日に開館いたしました。この原稿を書いているのが4月15日なので、現段階ではまだ開館前ですが、4月24日に開館式、翌25日より一般公開となります。24日の開館式は、これまでの間にお世話になった御関係者等を中心として阿部守一長野県知事始め行政関係等や地元の皆さん等お招きしてささやかに挙行する予定です。勿論、質素儉約に努める当記念館ですので宴席等も一切なく質素なものとなります。本来ならば、これまでの間にお世話になった多くの皆様方全てにお声かけ申し上げるべきところ、何分にも御寄付お寄せ頂いた方だけでも1,400人を超え、皆様全てに開館式の御案内を出来ないことをどうかご容赦頂きたいと思えます。翌25日より一般公開とし、GW中も休まず開館する予定です。お陰様にて既にいくつもの団体予約が入ってきており、数少ない記念館スタッフだけでは対応が困難なところから、飯田日中友好協会の会員の皆さんや、記念館をサポートしてもらうこと等をも視野に入れて新しい語り部の育成を目的として昨年1年間共に学習を進めてきた「ピースラボ」のメンバーの皆さん等、ボランティアの皆さんの動員も含めてその対応に当たっているところです。

この開館を迎えるまでに実に足かけ8年もの歳月を要してしまいました。これまで余り積極的には触れられることの少なかった「満蒙開拓」という難しい課題の多いテーマを主とした記念館ですから、苦難の道であることは承知のうえでのスタートでした。しかし、紆余曲折を経ながらも、逆にこの程度の期間で建てられたということは、それだけこのテーマが歴史的にも重要なテーマであり、このことをきちんと語り継ぐことの必要性を感じている方がそれだけ多かったことの証でもあると思っています。とは言え、当初の計画よりも2年程度遅れての開館実現となりました。足かけ8年、構想立ち上げ時から言い出しっぺとして関わってきた当方自身としても長い道のりではありましたが、私どもの力不足等もあり、建設が遅れ、この間に「俺の目の黒いうちに建ててくれよ」と寄付金を手渡してくれた皆さんの中でも多くの方が鬼籍に入られてしまいました。今日まで遅れてしまったことを心からお詫び申し上げつつ、「ようやく完成させることが出来ました」とご報告申し上げたいと思えます。

多くの人々に支えられてこそこの開館ですが、同時に、紆余曲折を経ながらも、「この記念館はどんなことがあっても建てなくてはならない」という記念館事業準備会の面々の強い信念の賜でもあったと自負してまいります。立ち上げ当初から中盤以降まで、全国各地からの尊い寄付金はお寄せ頂きつつあったものの当初の目標額には到底追いつかず、また行政等の支援もなかなか見通しが立たず、事業の行き先が見えない時期が続く中で、内心では「もうこの辺りで辞めにしておいたら・・・」という思いを抱いた面々もいたことでしょうが、しかし、準備会の中核となった幹事会等においても「もうこれ位で辞めにしておこう」という意見が出されたことは一度として無く、今日のこの開館まで漕ぎ着けることが出来たのは、偏に「どんなに大変でもこの記念館は絶対に建設するのだ」という強い信念があったからこそであったと思っています。

準備会の熱い思いと多くの皆さんからの温かいご支援に支えられの開館ですが、いつも申し上げていることは、これがゴールなどではなく、ここからこそが本当のスタートなのだということです。この記念館から何を発信していくか、そしてこの「満蒙開拓」という特殊なテーマを扱った記念館として、どのように経営を維持し、運営していくか、これからこそが本当の苦労なのだと思っています。幸い建設には公的助成をして頂きましたが、開館後の運営に関しての公的助成は一切無く、自主自立、自己財源のみで運営していくこととなります。財政的なこと等から専従スタッフも少なく開館後もボランティア等を頼りにしての館運営が続きます。また、それ以前に、我々のような素人ばかりのスタッフの手による展示内容で、複雑にして、いろいろな思いの交錯する満蒙開拓というテーマをどこまで表現出来ているか、不安を抱えての出発でもあります。学芸員等を抱える財政的余裕など到底なく、本当に素人同然のスタッフでの運営となります。しかし、「満蒙開拓を伝えていかなくてはならない、このテーマから学んでいかなくてはならない」という思いの点では誰にも負けないスタッフであるとも思っています。本来ならば、このような複雑にして大きなテーマは国、県等の行政で取り組んだり、大学等学術研究機関、教育機関等で取り組んでしかるべきテーマであると思います。しかし、これまでどこもこれに積極的に取り組まなかったことを我々民間主体の団体が取り組み、これを取り敢えずは開館まで漕ぎ着けたということは、これはこれで評価されるべきことであろうと思っています。あるいは、行政、研究・教育機関等が積極的に取り組もうとはしなかったテーマに我々などのような素人が取り組むこと自体が暴挙であり、身の程知らずということなのかも知れません。しかし、私たち準備会の中には元開拓団員も何人もおられ、またそれ以外にも沢山の開拓団員たちの生の声を聞き、当時そして今の現地事情等に精通するという点でも私たちは例え歴史的知識、学術的知識は浅薄であろうとも多くの実体験等に基づいているという強みを持っています。私自身も戦後の国内生まれではありますが、元開拓団員であった両親がいた開拓地を始めとして20回近くにわたり旧満州の開拓地等に現地実査に入っており(全て自費調査ですが)、戦後の旧開拓地の現実の姿を知るという点では他の誰にも負けないものと自負しています。こういった点からは少なくとも満蒙開拓関係者の声、体

験等を良く知るといふ点では自信があるものの、その一方で、このような記念館がなかなか建てられなかったというもう一方の理由、すなわち外地で起きたことであり、当時の混乱等から当時のことを物語るような資料等が極めて少ないという現実的問題から、展示内容の作成等にも資料不足、展示品不足等から極めて難航したことも事実です。そして、資金的限界等から建物規模も当初計画の200坪より142坪まで規模縮小したこと等から展示スペースも極めて狭いものとなり、その狭いスペースの中でどれだけ満蒙開拓に関わる多くの事象をどれだけ表現し、伝えることが出来るのかという不安も抱えてのスタートでもあります。

## 2. 記念館の館名の最終決定について

この記念館の館名を「満蒙開拓平和記念館」とするについては、その最終決定の段階で関係各方面よりのご意見等を頂くに際し、「方正友好交流の会」の大類事務局長のお力をお借りし、会員の皆様等よりも多くのご意見を賜りましたこと、誠にありがとうございました。それぞれのご意見等に対してきちんと御返礼等出来なかったことをお詫び申し上げますと共に、この紙面をお借りして厚く御礼を申し上げたいと思います。

この記念館の名称については、事業の立ち上げ当初から何回も論議されてきたことでした。特に、中国側にとっては忌避すべき言葉である「満蒙開拓」という言葉を敢えて館名に掲げたということについては多くの賛否両論が準備会の内外からありました。中国側にとっては、「満蒙開拓と言うが、無主地の荒野を切り拓いてという本当の意味での開拓などではなく、そのほとんどは中国農民の農地や家を奪って日本人開拓団員に分け与えたものであり、開拓などではなく侵略であった」という基本的立場にあります。この中国側の認識や忌避の思い等については私たちも十分に配慮しなければならないと思っています。しかし、私たちの記念館は、満蒙開拓を通じて戦争の悲惨さ、平和の尊さを語り継ごうというものであり、決していたずらに旧満州や満蒙開拓を美化したり、正当化しようとするものではありません。勿論、開拓団員の思いや苦難等も取り上げますが、同時に日本人開拓団の被害だけでなく中国側等にも多くの犠牲を強いたこと、満蒙開拓は侵略の加担という側面も持っていたという事実もきちんと伝えていかなくてはならないと思っています。私たちがこの記念館において「満蒙開拓」という用語を敢えて用いるのは、それを賛美、正当化しようとするものではなく、当時の日本が国策として「満蒙開拓」というまるで無主地の荒野を開拓するかのようなイメージを抱かせ、それにより実際の侵略性を覆い隠して、開拓団をも侵略に加担させていたという史実を忠実に伝えていくためには、例え中国側の人々にとっては忌避する言葉ではあろうも、当時、日本が用いた「満蒙開拓」という言葉を敢えて館名に冠することが必要ということが当記念館の館名の最終決定における基本的スタンスでもありました。「満蒙開拓」という言葉以外を用いたのでは、満蒙開拓の持っていたもう一つの側面、侵略の加担でもあったという史実を伝えることから目を背け

ることにもなると思うのです。この記念館の基本的スタンスを中国側の皆さん等にも理解して頂けるよう、展示内容や今後の活動等を通じて努めていかななくてはならないと思っています。

### 3. 開館後に向けて

8年の歳月を要して、満蒙開拓に特化した全国で唯一の記念館がスタートします。前述通り、展示内容、資料的等にもまだまだ不足で不安の多いスタートです。しかし、これまでどこにも建てられていなかった満蒙開拓に特化した記念館を、例え小さくても開館出来たということは、改めて満蒙開拓を通じて平和の尊さを発信していくという「負の遺産」を「正の遺産」に転換していくためスタートでもあります。また、この記念館は開館後も発展、進化する記念館でありたいと思っています。取り敢えずでの開館、スタートではありますが、開館後もいろいろな意見をお聞き、資料収集、調査研究等を進め、より充実したものとしていけるよう、随時、改善、進化させていきたいものと思っています。この記念館は、満蒙開拓や旧満州等に関する情報や交流等の交錯する場所にもしていきたいと思っています。「方正日本人公墓」の維持、支援に奔走する「方正友好交流の会」等とも今後とも連携し、活動を共にしていきたいものと思います。記念館のある長野県阿智村は交通不便な場所であり、またスタッフ等も数少なくご迷惑等おかけすることも多々あるかとは思いますが、「来てみて良かった」と言って頂けるような小さくともキラリと光る記念館にしていきたいものとスタッフ一同心しているところです。皆さまの御来館を心よりお待ちしております。

[所在地] 長野県下伊那郡阿智村駒場711番1

(中央道「飯田山本インター」より車約5分)

[開館日] 4月25日(金) 午前9時30分より一般公開

[開館時間] 午前9時30分～午後4時30分(入館は4時まで)

[休館日] 毎週火曜日、第2・4水曜日

※. 団体にて御来館の場合には事前予約をお願い申し上げます。

[事務局] 〒395-0303 長野県下伊那郡阿智村駒場711番1(記念館内)

(電話&FAX) 0265-43-5580

(記念館ホームページ) <http://www.manmoukaitaku.com/>

※. 開館に伴い、これまでの「一般社団法人満蒙開拓平和記念館事業準備会」は「一般社団法人満蒙開拓平和記念館」に名称変更し移行します。



戦前、中国東北部(旧満州)に日本人27万人が開拓団として渡った。長野県から3万3千余人で全国一多い。足跡を後世に伝える満蒙開拓平和記念館の開設を訴え、先頭に立ってきた。24日、県南部の阿智村に完成する。

母も亡き父も団員で、戦後は同県松川町に再入植した。原野をリノゴ畑にするため、木々の根を抜

く過酷な作業を手伝わされた。満州での開拓はもって敵しかつたに違いない。父に尋ねると、返事は意外だった。「畑も家も準備してあった。中国人から取り上げたと知り、まずいと思った」

何があったのか。不動産鑑定士の仕事の傍ら、元開拓団員を訪ね歩いた。飯田日中友好協会に入り、両親が暮らした吉林省水曲柳などを約20回訪れた。小作を強いられた中国人は語った。「家も畑も追い出されて悲しかった」

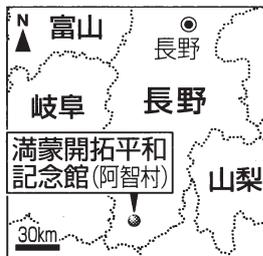
お年寄りたちが体験を語り出したのは今世紀に入ってから。だが、満蒙開拓を正面から取り上げた施設はない。「歴史が風化する前に自分たちで建てよう」。帰国者の手記や写真、証言の映像などを展示する資料を集めた。語り部を招いて集会を開き、自治体に資金協力を求めた。

展示では残留孤児や集団自決の悲劇と共に、土地を収奪した事実も伝える。「振り返りたくない事実でも、誤った国策とそれを国民が支持した過ちを繰り返したくないから」

文・写真 田中洋一

朝日新聞 2013年4月24日付け朝刊

戦前から戦中にかけて中国に移住し、敗戦時の逃避行で八万人の犠牲者を出した旧満州(中国東北部)の開拓団の歴史を伝える満蒙開拓平和記念館が長野県阿智村に完成し、二十四日に開館式があった。二十五日から一般公開される。



開館式が行われた「満蒙開拓平和記念館」の展示を見学する中島多鶴さん。24日、長野県阿智村で。

## 満蒙開拓団「歴史伝える」

約二十七万人の開拓団員のうち、長野県は都道府県別で最多の約三万八千人を送り出し、そのうち二割以上が県南部の飯田下伊那地方からだった。このため、飯田日中友好協会が記念館建設を提案。阿智村が用地を無償で貸し、県などの財政支援、全国からの寄付金で建設された。

開館式で、開拓経験者の中島多鶴さん(66)＝秦阜村＝は「歴史を後世に伝え、

### 長野・阿智村 記念館完成

命ある限り平和を求めて歩み続ける」と誓った。

記念館は旧満州や内モンゴル(蒙古)の開拓の歴史を資料や写真、映像で紹介。戦後、中国に残された人からの手紙も展示されている。開拓経験者の話を聞く会も定期的に開く。

開館時間は午前九時半～午後四時半。毎週火曜日と第二、第四水曜日が休館。一般五百円、小中高生二百円。電0265(43)5580。

東京新聞 2013年4月25日付け朝刊



満蒙開拓平和記念館の全景



記念館の内部

# たったひとつの願い

～「満洲」から故郷日本へ帰って～

こうけつ よみこ  
瀬瀬 代美子

## ■「満洲」へ

わたしは、昭和10（1935）年に、瀬瀬家の二女として長野県に生まれました。本籍地は、長野県木曾郡南木曾田立2121番地の1です。わたしが4歳のとき、昭和14年10月5日に、わたしの父の兄弟二家族一緒に、わたしの家族6人、おじさんの家族は8人で、「読書開拓団」として、中国の旧満洲三江省樺川県公心集栄安屯部落へ入植しました。

お父さんは、満洲へ行くことに、積極的だったようです。政府もそのときだけは、かなり力を入れていました。国の政策上の問題でしたが、もっと自分たちでも真剣に考えるべきではなかったかと、今さらながら言いたくなる気持ちでいっぱいです。

日の丸の旗の波に見送られて出発した日のことを、少しだけ覚えています。

翌々日には、朝鮮の羅津に向かって、大きな客船で日本を後にしました。朝鮮を通り、中国の図門を経て、読書開拓団近くの駅、閻家駅に着きました。開拓団からは、ダンプカーが迎えに来てくれました。ダンプカーに揺られて着いた村が、栄安屯部落でした。思ったよりも古い家ばかりでした。

部落の生活は、労働、食事、風呂といったすべてが集団生活でした。住まいだけは別々で、泥壁に草ぶきでオンドル付の古い家でした。集団生活は2年で終わり、農地も個人に分配されて、自分たちで生産するようになりました。お父さんとおじさんも、最初是一緒に農作業に取り組んでいましたが、それも1年で別々に生産するようになりました。

ところが、自分たちだけではなかなか難しく、わが家も中国人を雇って指導を受けながら、一生懸命頑張っていたようでした。

わたしは、8才から国民学校へ通うようになりました。

わたしのお父さんお母さんは、毎日朝ご飯の前に、いろいろと教えてくれました。自分の歳や兄弟の生年月日を、一人一人言わせてから、ご飯を食べさせました。戦争になってみんなばらばらになったらどうする？——家族みんなが覚えておいてねと言いました。

## ■昭和二十年、夏

8月ともなれば農作業はもう収穫を待つばかりで、ほとんどの農作業はすべて終わっていました。農作物はいつもの年よりできが良く、今年こそは大豊作だと、お父さんが嬉しそうに言っていました。お父さんが作った真っ赤に実ったトマトを、わたしとお姉ちゃんどで採ってきて家族で食べました。

8月5日の日でした。18歳から45歳までの男子全員に、召集令状が出されたのです。

わたしの43歳のおじさんと、その18歳の次男に、すぐに召集令状が届きました。翌

日には、もう出発です。こんなことになるなんて、誰が想像できたでしょうか？ 昭和20年8月9日、おじさんと次男は、とうとう親子二人、兵隊にとられてしまいました。

あの時、わたしのおとうさんが泣きながら言いました。

「中国へ行くと言った、わたしが悪かったんだ！」

中国に渡り7年になっていました。

あの時、家では馬4頭、にわとり100羽くらい飼っていました。それから全部捨ててしまいました。ワンちゃんも一匹いました。わたしはワンちゃんが大好きでした。いつか帰ってくるからねと言いました。

それから8月15日に連絡が来ました。開拓団の人たちが、日本へ帰ることになりました。一家族として馬車を準備し、お米や荷物をのせて出発しました。朝に出て、夜になって、ある汽車の駅に着きました。やっと着いたのに、汽車に乗れませんでした。

日本の軍人だけを乗せた列車が、無情にも開拓団員の目の前を通過して行きました。

駅に一晚泊まりました。泣いている人もいるし、そこから住んでいた場所に戻ろうとする人もいましたが、家には戻りませんでした。それからみんなで相談して、わたしたちの学校に行きました。みんな学校で泊まることにしたのです。

学校の前にひとつの村があって、その村には、わたしのおばさんが住んでいました。お母さんの妹です。その村では、中国人が家にぜんぶ火をつけて、火事になりました。おばさんと子どもたちはみんな、中国人に殺されました。

わたしのいとこのお姉さんは、トイレの中に潜って隠れました。身体はぜんぶ穴のなかに入っていました。わたしのお父さんが、水のあるところに連れて行って洗ってあげました。

## ■地獄の逃避行

それから8月17日くらいに、今度は反対方向へ逃げました。21日だったか、敵に見つかりました。敵は機関銃を持っていて、わたしたちの方へ、ぴゅんぴゅんと機関銃の弾が雨降るみたいに飛び出してきました。そこに川がありました。ちょうど川を渡る時に、機関銃の弾がタタタタタと飛んできます。わたしは水中に潜っていました。

ちょうど、弾が止まったみたいになりました。隣の原さんが三人の子どもの一人をわたしのお姉さんをお願いして、おんぶしてもらいました。わたしのお姉さんは16才、その子は4才くらいです。わたしがハッとして前を見ると、水のなかに誰かが倒れています。わたしのお姉さんとおんぶしていた子が、下を向いて亡くなっていたのです。

わたしは大きな声で、「お姉さん！」と声をかけましたが、ぜんぜん動きませんでした。おんぶした子と一緒に、頭を撃たれて亡くなっていました。

家の馬も、4頭のうち2頭が死んでいました。わたしはお父さんお母さんと一緒でしたが、お母さんはわたしの二番目の弟をおんぶしていました。お母さんは車輪のところで隠れていましたが、弟の頭が弾に撃たれて、弟は亡くなりました。弟を地面に寝かせて、早く死んだお姉さんや子どもと一緒に埋めてあげようと、お父さんとお母さんが話しました。水中からお姉さんを引き上げておんぶした子を外してあげて、いとこのお姉さんと、弟と、隣の子を、一緒に埋めてあげました。

そこで、わたしの家族は3人亡くなりました。夕方になると、敵が静かになりました。今度は山に入りました。山の中は食べ物がなにもありません。村の人々が集まってきて、家族・親戚の生存者を確認しています。私の家族は3人になりました。私のおじさん一家は、4人になりました。

そこから、毎日歩きました。ある時、日本の軍隊の人がいました。どこから来たのかわかりませんが、河を渡るとき、私たち一人一人を抱いて助けてくれました。

あの時、赤ちゃんを抱いていた人が、赤ちゃんを河に流しました。赤ちゃんは、ぎやあぎやあと泣いていました。その光景を、目の前で見ていました。

山を出て、ある村に着くと、中国の人が、水筒で豆腐のおからを飲ませてくれました。たまに、粟ご飯を運んでくれた中国人もいました。

山の中で水を飲むと、すごく嬉しかったです。一日中水もなく、ご飯も食べられません。そうして山の中の暮らしが一月経ち、9月末になりました。残った人たちで相談して、山を出ましようと話しました。方正県の南の方に、出て来ました。

## ■方正収容所

出てきたら、ソ連軍が見えました。私たちは草の中に隠れました。その時、白旗を立てた日本兵が来て馬から下り、わたしも日本人です、怖くないよ、と言いました。

方正県の南門のところで、日本兵は鉄砲をぜんぶソ連軍に取られてしまいました。それから日本兵はどこへ連れて行かれたのか、わかりませんでした。その後、ソ連軍が鉄砲を持って、私たちと一緒に方正県の東の村へ連れて行きました。そこに、収容されたのです。みんな、残った人も、子どもを亡くした人もいるし、いろんな人たちがいました。住み込んだところは、収容所という所でした。

10月に入ると、だんだん人々が病気になり始めました。毎日人が亡くなり出したのです。11月に入ると、寒くなりました。人が亡くなっても、埋めることができません。そのまま、一段、二段と、死体を上に積み上げるようになりました。山のように、積み上げることができるのです。

9月、10月に亡くなった人は、みんな生きている人が外に運んでくれました。11月、12月に亡くなった人は、そのまま部屋の中に置くようになりました。1月、2月になると、ほとんど全ての人が亡くなってしまいました。

ある朝起きたら、わたしのいとこのお兄さんが叫びました。

「ヨミちゃん！ 早く見て！ ヨミちゃんのお父さんお母さん、ぜんぜん動かないよ！」

わたしが、「お父さん！ お母さん！」と呼んでも、返事はありませんでした。

最後にわたしのお父さんお母さんも、一緒に亡くなりました。後に残されたのは、わたしと、いとこのお兄さんと、二人だけになりました。そのとき、いとこのお兄さんは、「二人きりになってしまっとうしょう……」、とわたしに聞きました。

わたしは10歳でしたが、お母さんが生きているときに教えてくれた話を覚えていました。もしお父さんお母さんが亡くなったら、東村の丸山のおばさんを探すんだよ、と教えてくれていたのです。

「丸山のおばさんのところ、わかる？」とお兄さんに聞くと、わかるよ、と言います。

「ぼくね、おばさんが生きてるとき、1回連れていってもらったんだ」

### ■中国人の家庭へ

それで、いとこのお兄さんが東村へ、朝の5時ころ出かけて行きました。

丸山のおばさんは、中国人の楊家のおじさんを紹介してくれました。それから、中国人のおじさんが来ました。

おーいおーいと、大きな声でわたしを呼びます。

わたしは、お父さんお母さんが亡くなった部屋をでていきました。おじさんは、わたしを連れていくと言います。あ那时的わたしは、くつもなく、着るものもなく、夏の服のまま、髪の毛はシラミがいっぱいでした。

それでも、中国人のおじさんがわたしをおんぶしてくれたり、自分で歩いたりしました。くつはありませんでした。わたしの父が生きてるときにわたしに編んでくれた、わらじをはいていました。

中国人のおじさんが、冬のなかでわらじをはいたわたしを連れて歩き、やっと村につきました。このおじさんは、この村で豆腐屋さんをやっていました。

家のなかに入ったら、丸山のおばさんが見えました。わたしは丸山のおばさんの手をにぎって泣きはじめ、お兄さんも泣きました。

中国人のおじさんは、「男の子はいらない、女の子だけ連れて家へ帰る」と言いました。わたしと、いとこのお兄さんは、手をつないで泣きました。いとこのお兄さんが話しました。

「ヨミちゃん、オレがもし生きていれば、ヨミちゃんをきつと探しに来るからね。今度はひとりぼっちだよ、オレもひとりぼっちだよ」

二人で泣きながら別れました。

その後、中国人のおじさんが馬車の上にわたしを乗せて、方正県へいきました。それから、中国の楊家の子どもになるのかどうかも、わからないまま家のなかにはいました。家のなかにはいるのが誰なのかもわかりません。おじさんの奥さんは泣いています。夫婦喧嘩になりました。

わたしを連れてきたおじさんが、お兄さんの奥さんに聞きました。お兄さんの奥さんは、あんたがいらないならわたしが欲しいよ、と言いました。そのときは12月ころでとても寒く、零下30度くらいの気温です。わたしを連れてきたおじさんの奥さんが、言いました。

「この子を生かすことないよ。今夜、馬小屋に出しておけば、朝には凍って死んでるから」

お兄さんの奥さんは、「あんたはいらないって言ってるくせに、なんで文句を言うの？」

と言い返しました。

わたしの中国のお母さんが、わたしを連れて自分の部屋にいき、いすの上に座らせました。この子は汚いから、人が住むところにおけないよ、シラミだらけで。中国のお母さんは、熱いお湯をつくって、大きな洗面器に水を入れて、わたしの頭とからだ中をぜんぶ洗ってくれました。2、3日中には、ふくも作ってくれました。草のくつも、1日で編んで作ってくれました。

それから、3月くらいになると病気になりました。毎日、家のおばあちゃんがわたしを連れて病院へ一カ月通い、治療してくれました。4月になると、治りました。

わたしの中国のお母さんには、4才の男の子がひとりいました。わたしは毎日、一緒に連れて子守りをしてあげました。それから、中国語もすこしずつ覚えました。12才になると、毎日買い物にも行くようになりました。たまに買い物に行くと、いい酒屋さんも、悪い酒屋さんもいます。お酒を買うとき、家からビールビンのようなビンを持っていくと、いっぱい入れてくれることもあるし、3分の2くらいのときもあります。

お父さんは、いつもわたしを殴りました。お金をためてなにを買って食べたんだ、と怒りました。わたしはなに食べてないと言いました。それでも聞いてくれず、1時間くらいわたしを殴ります。しゃもじみみたいな板で手のひらを叩きながら、頭も殴ります。

泣いてもむだです。わたしを殴るときは、いつもおばさんが家にはいないときだからです。

わたしのお父さんは、とても厳しく怖い人でした。雨が降ろうがどんなときでも、酒を買ってこいと言うと、早くいかないと殴ったり蹴飛ばしたりします。すごく怖かった。

ある日、外はすごい大雨で、雷がぴかぴか落ちて、歩く道も見えない。壁にぶつかって、頭を針金に刺されて血がでて来ました。

そんなときには、どうしてお父さんお母さんはわたしを残して亡くなったのか、どうしてわたしにこんな苦勞をかけるのか、と思いました。ごはんを食べるときも人の顔色をうかがいながらで、毎日、幸せを感じることはありませんでした。わたしはいじめられ、叩かれてつづけました。

## ■もらわれてちがう家へ

あるとき、お父さんのおばさんが、遊びに行くよと嘘をついて、わたしを方正県から愛国村に連れていきました。わたしはまだ子どもだったので、なにもわかりません。2、3日経って、わたしは現在の主人のお母さんにもらわれました。とうもろこし1500斤と交換に。あのとときの東北のお金で上着一着分くらいの値段、5千円くらいでしょうか。

今度は知らない家に来て、すごく怖かったです。毎日、おばさんはなんでわたしをこの家にあげたのか、と思いました。毎日、心の中で考えます。いつか、誰かがわたしを助けに来るかしら？——夜なると、ひとりで泣いたり、考えたりします。

3ヵ月が経ちました。わたしはその田さんの家で病気になりました。わたしの主人の母が、今度病気が治ったら人にあげようかと話していました。その頃、わたしは13才。中国語が少しわかるようになっていました。毎日が、心配でした。またいつどこへ売られるか、わかりません。

14才くらいになると、わたしは家の畑で働くようになりました。わたしの今の主人は、あのとときわたしをととても嫌っていました。日本人の嫁はいらないと。わたしの姑は、前の中国のお母さんよりはよかったけれど、自分の親とは違うので、どうしても厳しくなりがちです。私が17、8才のときに、結婚をしました。親が生きていれば、こんなに早く結婚をしないですんだことでしょう。

結婚して3年くらいで、主人のお母さんが亡くなりました。その後、すごく苦勞しました。子どもが3人になったころ、主人がわたしをいらないと言い出しました。主人は自分

の家に帰りません。わたしと子ども3人、行く先はありませんから、わたしはどこへも行かないよ、と言いました。親も亡くし、そのとき日本にも帰れず、わたしの一生、いいことはありませんでした。旧満洲の氷点下30度くらいの寒いところで、46年苦勞して来ました。わたしは畑で働きました。

わたしは中国で、ひとりぼっちでした。親戚もいません。だから、子どもが欲しかったのです。わたしの家族は戦争でなくなり、ひとりで苦勞をしたので、子どもはたくさん欲しかったのです。子どもは8人産み、育てました。

わたしの長男が高校へあがるときに、親が日本人だという理由であがれませんでした。子どもが学校でもいじめられました。日本の「小鬼子」だと言って。中国でもいじめられました。

## ■祖国へ帰る

そのうちにやっと、田中首相になって日中関係はよくなり、昭和47（1972）年に日中の国交が回復しました。わたしは、すごく嬉しかったです。今度きつといつの日にか、日本へ帰れると思いました。それから、何年も経ちました。

昭和51年、連絡のとれた従兄弟に手続をしてもらい、念願の一時帰国をしました。夢にまで見た祖国の土を踏み、わたしは何としても永住帰国をしたいと思いました。しかし従兄弟は、日本語ができないまま帰国しても仕事がないと言って、強く帰国に反対しました。わたしは中国に戻り、厳しい農作業の合間に日本語を猛勉強しました。それでも従兄弟は、わたしの永住帰国には反対でした。

日本政府は、わたしのような身元判明「孤児」は、親族が帰国に同意しない限り永住帰国を許さない政策をとっていたのです。そのため、わたしの永住帰国は遅れました。

昭和60年6月11日に、ようやくわたしは祖国の日本に帰って来ました。夫と4人の子どもを連れて、50歳になる直前でした。

帰国後、埼玉県所沢市の中国帰国孤児定着促進センターに入学し、4カ月半、日本語を勉強しました。言葉は難しいので、なかなか覚えられませんでした。それでも、自分の故郷に帰ったのですから、嬉しかったです。

それから、長野県長野市に住むようになりました。1週間ほどが経ち、市役所の厚生課の担当者が来ました。わたしに、仕事を探そうと言います。4日くらいで、仕事が見つかりました。長野中央病院での、清掃の仕事につきました。毎日朝8時から午後5時まで、時給700円で、3年間働きました。

この仕事、すごく厳しかったです。わたしは言葉ができないので、みんなにいじめられました。病院の清掃が仕事で、男性1人、女性5人です。1週間に1回、日曜日に解剖室の掃除をします。人が亡くなったら、解剖をする部屋です。わたしは日本語がわかりません。みんな、やろうとしません。いつもわたしがやらされました。

すごく汚いところです。冬はまだいいけれど、夏になると壁の上にも虫がいっぱいいます。それに、水をかけます。ひとつも、いい仕事をやらせてくれませんでした。わたしはいつも、冬は寒いところ、夏は汚いところです。盗みの疑いをかけられたりもしました。

3年くらい耐えて働きましたが、あまりにいじめがひどくなり、千葉市に引っ越して来

ました。千葉日本語学校がありましたので。子どもは自立センターへ入学させました。

3人の子どもは、長野東高校の次男を長野において、6年生の五女、3年生の三男を連れて千葉に来ました。わたしの主人は、日本に来て仕事はできませんでした。日本語ができないので、毎日、中国へ帰りたいと言っていました。

千葉市で、わたしは身体を壊して倒れ、主人も心臓病で働けなくなり、やむなく生活保護を受けました。主人は中国にいるときも、いつもお金をわたしにくれませんでした。3人の子どもが学校に通い、くつも服も買うお金がありません。中国の親が亡くなるときに、妹の面倒を見て欲しいと話していました。でもお金がありません。生活費は、主人が自分で使います。食べものは買うけれど、着るものは買ってくれません。

子どもの服と運動靴、修学旅行の費用など、生活保護だけではとても賄えません。日本の慣習もよくわからず、福祉機関にも相談せずに、パートの仕事を探し、3人の子どもを学校に通わせました。わたしは一生、学校に行けなかったのに、子どもたちにはどうしても学校に行かせてやりたかった。日本と一緒に帰国した子どもたちは、ともに高校まで行かせました。

やがて生活保護を受けながら申請せずにパートをしたことが役所に見つかり、5年間、毎月3万円ずつ生活保護費から差し引かれ、空腹に耐えながら極貧生活を送りました。団地の人たちからは、「中国人のくせに、なんで日本に来たんだ、税金で生活するなんて最低だ」と言われました。何度も死のうと思いました。

人生の最後に、「故郷に帰って来てよかった、日本人に生まれてよかった」——と心から思いたい。それがわたしの、たったひとつの願いです。

(この文章は、瀬瀬代美子(こうけつよみこ)さんの手書きの手記を、森一彦がまとめました。)



(写真：瀬瀬代美子さんとご主人の田文学さん)

## “馴染の地” になった 方正

会 員 吉 川 雄 作

私が初めて方正を訪れたのは2006年6月、当会参与の奥村氏が千葉市幕張で主宰する中国語教室の一生徒として、毎年この時期に行われてきた方正日本人公墓参拝ツアーに誘われてのことであった（会報3号で報告）。以来、2010年に再訪（会報11号で報告）、そして昨年、3度目の訪問で、私にとって方正は“馴染”の地となった。

\*馴染：③同じ遊女のもとに通い馴れた客。吉原では、3度目以降の客をいう。

「広辞苑」

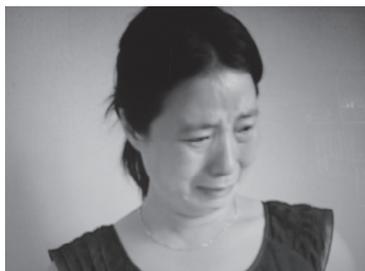
観光目的で何度か外国旅行をしているが、三たび同じ町を訪れたのは、方正だけだ。

しかも二度目からは、「ドキュメンタリー制作のためのビデオ撮り」という、私にとっては責任重大、いわば“仕事”を抱えての外地訪問である。

◆奥村氏を含む四人組で、(未認定中国残留孤児) 徐士蘭を主人公にドキュメンタリー映画の制作を企てていることは、すでに奥村氏の「わたしの方正之路」で予告されている（会報15号）。制作作業は着々と……と言いたいが、次々に新案提示で予定通りとはいかない。当面は第2部（滞在記録）を早期に仕上げ、上映会開催を目指すこととし、第1部（実現までの経緯）を加えた全篇完成は来年を期すことに……。完成が、「未だし」なのに“こぼれ話”でもないが、私と方正・徐士蘭とのこれまでを記し、映画制作の中間報告としたい。

◆じつは、初めて方正を訪れた2006年、それとは知らず徐士蘭との出会いがあった。到着の日、鑫禧商務酒店での夕食後、われわれ奥村教室生徒4人は、予定されたプログラム、現地日本語学校（王鳳山校長）の生徒との交流会で、学習のこと、趣味のことなどを、お互い片言の中国語と日本語ながら、“交流”していた。しばらくして、急に入り口の辺りが騒がしくなった。振り返ると、一人の女性が奥村氏に大声で何事か訴えている。あとで分かったことだが、その女性が徐士蘭で、日本から来た訪問団に「自分は日本人だ……」と訴えに来たのだった。

◆2008年に制作され、大きな反響を呼んだ羽田澄子監督のドキュメンタリー映画「嗚呼 満蒙開拓団」の中で、彼女が、「……私は自分が日本人とは知らなかった……一度帰れば諦められます。ずっと一晩中、眠れずに思っています……、



自分の祖国にも帰れないし、自分の親も分からない……」

と激しく訴える場面があり、

傍らに立つ長女叢会艶さんが、じっと涙をこらえている様が強く印象に残る。



\*写真は映画「嗚呼 満蒙開拓団」から

◆そして、2010年の再訪。このときはすでに映画製作のことが具体化(?)しており、墓参とともに、徐士蘭へのインタビューと方正市街、名所等のビデオ撮りという目的を持つての方正訪問であった。所定のコース巡りを終えた後、本隊を送り出し、飯白氏と1日、方正に残留して、徐士蘭宅で聞き取りなどのビデオ撮影をおこなった。

◆2011年6月、奥村氏の奔走努力と多くの方の協力によって、徐士蘭と三女叢会霞の招日を実現することができ、10日間の日本滞在中、ほぼ全日程にわたって行動をともにしてビデオに収めた(会報13号)。

そして昨年、三度目の訪問を果たしたことにより、方正は“馴染みの地”になった。また、家族とも何度か食事を共にする機会が加わったことで、方正の地だけでなく、徐士蘭一家の存在は、私にとってさらに近いものとなった。



西伊豆“虹の郷”菖蒲園で

◆2012年、三度目の訪問の目的は、それまでに撮影した映像では足りない部分、その後得られた情報により、ゆかりのある場所や彼女の幼児期を知る人を訪ね、補足的な撮影やインタビューをすることであった。

前回同様、本隊を見送った後、飯白、是洞、吉川の残留組三人は、徐士蘭、三女・叢会霞、三男・叢保国さんとともに、①徐士蘭が養父に預けられた小学校(彼女はその学校に行かせてもらえなかったのだが……) ②徐士蘭が以前暮らしていた町内(新城村) ③幼児期を知る人のお宅 ④95年1月、交通事故に遭った場所……等を訪れた。

◆最初に訪れた小学校は、場所は同じだが、(たぶん何回目かの)建て替え工事中で、道路の反対側から見上げるしかなかった。しばらく叢会霞さん、叢保国さんが飯白氏と是洞さん相手に説明をしていたが、徐士蘭はここでもあまり話に加わる様子にはなかった。5階建て、大きなクレーンが動く目の前の光景は、彼女の、あるかなきかの記憶につながるようなものでないことは明白だった。

徐士蘭は、以前叢会霞さんからの手紙にあったように、難聴が進行していることもあってか、家族を交えた場でも終始無口で、ほとんど会話に加わることはなかった。

◆学校から程近く、結婚した頃に住んでいたという一角に歩いて行った。方正の標準的と思われる庭付き二軒長屋が並ぶ住宅地を歩く。所どころに同じような作りの古い草ぶきの家が残る。そんな中の一軒を覗き込んでいると、中から上半身裸の男が出てきた。一瞬何か咎められるのかと思ったがそうではなく、親族が叢会霞さんの病院に入院中(?)だという王希勝さん(72歳)だった。前庭に招き入れられ、しばしの立ち話。徐士蘭とは同年輩と見えたが、彼女は特に嬉しそうなそぶりもなく、話にもあまり乗らない様子であった。

◆比較的よく話していたのは、二軒目、86歳翁夫妻の家を訪ねたときだ。突然の訪問にもかかわらず、われわれも家の中に招き入れられた。彼女の幼児期を知るというその86歳翁

とソファに並んで坐った徐士蘭は、長いこと生き生きした表情で話が盛り上がっていた。話の内容は分からないが、楽しい再会と見てとれた。

◆だが、われわれの滞在中、徐士蘭は、羽田監督作品中で見たような、感情あらわに大声を出すようなことはなかった。いつも一歩引いて穏やかな、“普通のおばあちゃん”に見えた（ちょっと寂しげな表情を見せることはあった……）。映画の中で、「一度帰れば諦められる」と訴えていた言葉どおり、前年、念願の日本への“帰国”を果たしたがために、「日本人と認定されたい」という情熱を失ってしまったのかと、少し気になった。

◆ハルビンに戻る日はあいにくの雨であった。方正を離れる前に三女・叢会霞さんが勤務する病院「方正人民医院」を訪れた。6階外科病棟、ナースステーションで、白衣姿に、黒線二本入りの帽子、“婦長さん”がキマッた彼女を撮影できた。



◆一度自宅に戻って、いよいよお別れするとき、ファインダーの中の徐士蘭は、飯白・是洞両人と手を握り合い、何ごとか言葉を交わしながらちょっと涙ぐんでいるように見えた。

方正人民医院と 看護婦長 叢会霞さん

三男叢保国さんの車の中から、水滴が流れる窓越しに、徐士蘭と孫洪波さんの手を振る姿が次第に小さくなっていく……。メロドラマのエンディングのようなシーンが撮れた。

---

## ＝付記＝ 幼児期の記憶について

徐士蘭招日のおり開いた歓迎会、千葉と東京両方の会場で、彼女が養父母に預けられたのは3歳前後だったという説明に対し、「3歳ぐらいただったら、何らかの記憶があるのでは……」という声が聞かれた。

一般的に言えば、人は悲しみや苦痛の記憶は早く消したいと無意識に願う。それは、歳月を重ねるうちに角が取れて、柔らかな思い出に変わりもする。一方で、他から屈辱を受けた憎悪の記憶は、忘れたくても忘れられず、時に年とともに強くなる場合さえあろう。

また、程度が極端な場合、苛酷な経験や衝撃的な出来事は、記憶の空白となってしまうこともある。幼いときの記憶には、周囲から聞いたことを「自分の記憶」にしている場合も十分あり得る。それまで頭の中にあるとも言えなかった“隠れ記憶”が、縁ある人と話したり、特定の場所に立つことにより、突如蘇った、という経験が、私にもある。

幼児期の記憶のあり様は、人により場合により大きく異なり、同じ条件下にあったからといって誰もが「必ずこうなる」とは限らないのが、記憶の世界なのではないだろうか。

昨年われわれが方正を訪れた際、久々にゆかりの場所を訪れ、往時を知る人と話したことで、彼女の中に、何かしら“記憶の蘇り”があったのかどうか……。それは分からない。

# 史実を学び、伝えたい

松島 赫子

2010年「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」企画のツアーに方正訪問が含まれていることを知って私も参加した。その前年、ある偶然により方正を知り、“積ん読”状態にしていた来民開拓に関する2冊の本『たたかいの祭り』と『赤き黄土』を読んで、いつか方正へと思ったのが思いがけず早く実現することになった。(来民開拓団は1945年8月17日、宮本貞喜さんのみが、自決する開拓団の最後を祖国日本に報告する任務を負い、団から脱出。残る275名は集団自決した。その中には、宮本さんの妻子、孫も含まれていた。)

私は同会のツアーには2005年にも参加していて、それは撫順戦犯管理所60周年の式典参加が大きな目的だった。2010年も65周年式典参加や731部隊跡を訪問することなど、ほぼ同じコースだったが、新たに方正にも行くということで参加を決めたのだった。

## 歴史に無知だった私たち

1945年生まれの私は、いわゆる戦後民主主義教育の下で育ったはずだった。しかし、その内実が真の民主主義教育であったのか誠に疑わしい限りで、とりわけ歴史に無知なまま私は大人になってしまっていた。大人になっても依然として無知だったし、さらに言えば、無知であるという認識さえなかったと思う。

そのような私であったが、昨夏急逝された仁木ふみ子さん(前・撫順の奇蹟を受け継ぐ会代表、前・中帰連平和記念館館長)に1991年「関東大震災の時殺された中国人労働者を悼む会」設立時に誘われて入会し、多くの学ぶ機会を得ることとなった。

入会当時の私は震災下における朝鮮人虐殺は多少なりと知っていたが、中国人虐殺については何も知らず、エッ? そんなことが・・・といった状態だった。しかし、それ以来、私は仁木さんに導かれて、日本の加害の歴史、それに対する人々の抵抗の歴史などを学び続けた。

この会はその後「中国山地教育を支援する会」、そして「中国山地の人々と交流する会」と名称を変え、2010年で交流をほぼ終えたが、支援交流は虐殺された中国人の出身地である浙江省温州と、日本軍が過酷な三光政策を実施した河北省興隆県とであった。

私は温州には1度行っただけだったが、興隆訪問は10回に及び、日本軍侵略当時のことを数多くの人々に聞かせてもらった。

興隆の人々は家を追われ(住んでいた所は“無人区”と呼ばれ、住むことを許されなかった)、人圏に住まわされた。日本軍はそこを“部落”と言ったが、人々は家畜の如く閉じこめられたという意味で“人圏”と呼んだ。人圏でのくらしは悲惨を極めた。また、この山深い興隆には根拠地があり、人々と八路軍のつながりが強かったのも、一般住民であっても拷問されたり、殺されたりする人も多くいた。

## 驚きだった方正公墓の存在

私は熊本の日中友好グループにも参加するようになっていて、このグループでは主に南京と交流している。ただ、去年は日本軍による長期間に渡る空からの大爆撃に苦しめられた重慶にも行った。中国訪問の目的を日本軍の侵略の跡をたどることにしぼっているのが、当然のことであるが、行った先々で日本軍の残虐行為の数々を聞くことになり、衝撃を受け続けている。

だから方正の日本人公墓の概略を知った時は驚いた。現地に行って、「中国養父母公墓」「藤原長作記念碑」なども建立されていることを知り、それらにまつわる話を聞いた時は大変感動した。本当に「中日友好園林」の名にふさわしい場所だと思った。

あれ程のしうちを受けながら公的に墓が建立されたということと、撫順戦犯管理所で元日本兵たちが人道的待遇を受けたことは通底していると思う。興隆の人々の姿勢もまた、同様だった。多くの人が証言の前に「あなたたちがこんな所にまで来てくれたことに感謝します」と謝意を表された。そして、「今日の話はあなたたちの気にいらなかったかもしれませんが、事実あったことですからご了承下さい」「私たちは共に平和な世界を創りましょう」というのが、ほとんどの証言者の結びのことばだった。日本が過去に侵略し残虐行為をした事実を消すことはできない、だからそのことはちゃんと知っていてほしい、そして、このようなことを再び繰り返さないように歴史をふまえて共に協力しましょう、と被害の側の人々が加害の側に手を差し伸べてくれるのだ。しかし、多くの日本人は侵略行為の実相も、中国政府や中国の人々のこのような態度も深くは知らない。

## 問われるメディアの報道姿勢

無知なまま何年も過ごした私が言うのもはばかれるが、あえて言いたい、政治家やメディア関係者に歴史の事実を学んでほしい、と。せめてメディアにかかわる人がもっと学んでいれば報道のあり方が変わり、政治家を含む人々の意識も違ったものになると思う。

報道姿勢について、方正の件に限って見ても、2011年石碑にペンキがかけられ、中国国内で石碑建立への抗議が広がったことは大きく報道されたが、どのような経緯で石碑が建立されたのかを歴史的側面から報じたものは少なかった。私の知人たちが「中国ってこわいね、また反日行動している、という方向で伝えている」「被害の側が方正に墓を作っただけでも素晴らしいのに・・・歴史を知らない見識のなさに情けない思いだ」と言っていた。私も同感だった。何故墓がそこにあるのか、何故開拓民がそこまで逃げ惑ったのか、そもそも何故日本人が「満洲」に入植したのか、何故、何故と掘り下げて考えていくべきなのに、いつも表層を見るだけで、人々の感情を煽り立てる報道が多すぎる。戦前戦中の報道のあり方を関係者は反省したのではなかったのか。今、再び・・・の危惧を持たざるを得ない状況だ。私自身ももっと学び、学んだことを伝えていかなければと思うこの頃である。

(まつしま・かくこ：1945年生まれ。熊本市在住。元公立中学校音楽教師。「中国山地の人々と交流する会」世話人。熊本「平和と人権フォーラム」理事。3・11後、仲間と「熊本・原発止めたい女たちの会」を設立し、反原発運動にも関わり、原告、告訴人として訴訟にも参加している)

## ① 気まぐれ天気の逆襲 —今年の日中花見の宴

昨年、4月8日に方正の帰国者たちと催した「歓賞桜花」の会は、雲一つない絶好の天気に恵まれて、中国では経験したことのない「お花見」という日本の伝統文化を、中国帰国者たちに堪能してもらうことができた。しかもこの催しを盛り上げたのが、帰国3世の瀨瀨夢翔ちゃん（小1）が躍る軽快な踊りと、彼女の祖父・田文学さんが披露した中国東北3省で古くから伝わる「二人転」の歌だったことは本誌14号で既報の通りである。

この話が帰国者たちに伝わって、今年は70人の大パーティになるはずだった。

2月に入って私たちは気象庁の長期予報から、3月31日（日）を予定した。しかし東京・九段の桜が例年より2週間も早い、という気象庁の発表を聞いて、予定を1週間繰り上げ、3月24日に変えた方がよくはないかと迷い続けた。既定通り31日でもいいと判断したのは、寒暖ただならぬ今年の天気の“浮気っぼさ”による。そして千葉で桜花満開のタイミングは、まさにこの予感とピッタシとなった。

ところが1週間前の天気図あたりから不安が日ごとに強くなっていった。前日（3月30日）の夕方、私は帰国者をまとめている朱式嶺さんと相談し、「明朝8時半に、中止するかどうかを判断しよう」と決めた。

さて翌朝、いつものように5時に起き出した私は、外に雨が降った跡を見た。そして何よりも肌寒い。「8時半に判断を迷うような雲行きにならないでほしい」そう思っていた8時、外は小雨が降り出している。そして朱さんから電話が入った。「中止だね。」何日も前から、翌4月1日（月）は、この1日だけ全国的に「晴れ」の予報だった。私はあらかじめ、31日が悪天候で中止になった場合、翌日が可能かどうかの情報を集めていた。帰国者2世たちは仕事があり、1世たちも孫を見るとか友人と会う約束とか、それぞれ週初めに所用があったりして、参加者はほとんど期待できなかった。

### ■主役は方正へ

ただ、予定された31日のために、朱さん夫婦や瀨瀨さんは、すでに2、3日前から様々な中国料理を作って当日に備えていた。花見の中止によって、これが大量に残ってしまう。「翌日に少人数でも花見をやるなら、もうできている料理を届ける」と朱さんから連絡が入った。スタッフの一人がこれを受け取りに行って大荷物をシートの上に広げた。参加者は7人。もしも予定の当日、好天なら、年ごとに増えてきた団体のエリア確保のために、目指す場所に前日からシートを広げ、そこに「方正の会」という小さな立て看板も立てる計画で、すでに万端、準備は整っていた。それが1日ずれて好天とはなったものの、いざこの主催者も天気に肩すかしを食ったためか、11時半現在になってもシートを広げた花見の席は私たちばかり。午後になって、ようやく家族らしい花見のシートが、ご主人不参加のまま、2か所で散見されただけである。

それよりなにより、私たちがこの日に登場を待ったのは、去年の花見で私たちを熱狂さ

せた二人の主役だった。元気にアップテンポの踊りを見せた帰国者3世の少女・夢翔ちゃんと、私たちが初めて聞く中国東北3省の伝統芸能「二人転」を歌ってくれた夢翔ちゃんの祖父・田文学さんの姿が見えなかったことだ。実は夢翔ちゃんのお母さん・優理恵さんがひどい花粉症で重症に陥り、春休み中の夢翔ちゃんを連れて方正の実家へ一時避難しているためだった。

期待が膨らんだ今年の「観賞桜花」はこうして散る羽目になってしまった。

## ② 意気軒昂な93歳と94歳 —松田ちゑさんと川島良吉さん

松田ちゑさん（93歳）といえば、方正の日本人公墓生みの親として、また文革中、地元の県、省から死刑判決の批准を求められた中央政府が、公墓建設を許可した経緯を覚えていた周恩来総理によって即刻無罪釈放とされた女性として知られる。

その松田さんが昨年暮れから新年にかけて風邪から肺炎を併発、入退院を繰り返したことを知った。とるものもとりあえず東京・板橋の自宅を訪ねた。息子・崔鳳義の奥さんが自室のベッドで寝ている松田さんに、私が訪ねてきたことを知らせに入ったのを見て、私はその返事も待たず、松田さんの4畳半の部屋を覗いてみた。寝ていた松田さんはすでに起き上がってベッドの縁に腰かけていた。私が待つリビングルームへ足を運べるかどうか、自分に尋ねているようだった。「動かないでいいよ、松田さん！」と言って私は部屋に入り、松田さんの隣に腰を下ろした。

「この人、だれか覚えている？」

崔夫人が松田さんに聞く。前回訪ねた時も崔夫人が同じ質問をしたが、今日も嫁から同じ質問をうけて松田さんは、あの時と同じ柔和な笑顔を見せ、3度の脳梗塞で回りにくくなっている口でゆっくり「オクムラサン」と答えた。私は胸が熱くなった。

「午前中は意識が普通だけど、午後から夜になると、だんだんおかしくなっていて、自分が今どこにいるかもわからなくなるみたい」

と崔夫人。目の前の箆笥の上に、小さな仏壇と何枚かの写真が入ったプラスチックのケースが飾ってある。人が一生で体験する苦勞の何倍もの重荷を背負って生きてきた松田さんも93歳、ようやく休息の時期を迎えようとしているのだろうか、ふと思った。

そこで帰宅後、私などよりずっと早く、松田さんがまだ方正で暮らしていた頃から親しかった吉田敬子さん（長野県在住）に近況を伝えた。その結果、改めて二人で松田さんを訪ねる約束をした。ところが約束の日、松田さん宅へ電話すると松田さんが不在だ。これはまた体調が思わしくなくて入院かと思ったら、なんとデイサービスに出て行って夕方5時まで戻らないという。肺炎で入退院を繰り返していた松田さんがもう、毎日、デイサービス通いという元気な日常に戻っていたのである。私は信じられない想いでこれを吉田さんに伝え、この日の訪問を延期した。

### ■ 供託金は葬式代

同じころ、私はもう一人、年は私より一回り多い94歳だが、私よりはるかに若々しい生き方をしているご老人と知り合った。川島良吉さん、先の衆院選で、葬式代300万円

をはなから没収覚悟の供託金として出して埼玉12区から立候補、「日本国憲法を守ろう」と奮戦して最下位で落選した人だ。

保守本流が勢いを増す中、これを阻止する陣営が即応態勢をとれない状況に苛立っていた私は川島さんに手紙を書いた。すると彼の一人娘の夫・田中修さんから電話がかかってきた。そして「本人に代わるから」と言う。代わって電話に出た川島さんは、若々しい声で延々と話し続けた。

先の戦争で中国の揚子江流域に出兵していたこと、その近くに来ていた皇族のこと、いまの日本のこと、日常生活のこと、ほかの理由でメガネはかけているが視力は1.2であること、買い物やほかの用でよく車を運転していることなど、話はとどまるところを知らない。娘夫婦とは別の一人暮らしを望み、買物から所要すべてを一人でやっているという。

「おじいちゃんが没収された供託金は、俺たちが集めて送るから」

と言ってきた北海道の若い音楽グループがいたり、その反響は全国に広がっているようだ。

「×日に、新聞報道で知った若い支援者たちが集まるんですけど来ませんか」

田中さんが誘ってくれた。残念ながらその日はほかの用と重なっていて参加できず、お詫びに手づくりのものを少し送った。田中さんによれば、川島さんの毎日は次のような生活だそうである。

前夜の就寝が午前3時ころ、6時に目が覚めて、寝床でラジオのニュースを聞く。起き出すのはお昼頃だが、寝床から起き上がるには足裏マッサージ、乾布摩擦など30分やり、血行を良くしてから。日常生活の買い物は、夜7時ころに、車を運転して出かける。こうして夜型のマイペース人生だが、3月25日、突然、激しい腹痛と吐き気に襲われた。自分で市役所(埼玉県羽生市)へ電話して緊急入院、「総胆のう管結石症」と診断された。当面の治療を受けていったん退院、4月15日にあらためて手術を受けることになった。

### ③ ノーベル賞作品の身近さ — 「猫腔」と「二人転」

昨年の花見から私は、それまで全く知らなかった中国東北三省(遼寧省、吉林省、黒竜江省)で古くから受け継がれてきた民間芸能「二人転」に関心を抱き続けてきたが、最近、その延長線上でまた新しく中国文化の奥深さと新しさを知ることになった。

一つはノーベル賞作家・莫言の作品『白檀の刑』に出てくる「猫腔」という民間芸能である。これは前述の「二人転」解説書にもよく出てくるが、莫言さんの出身地・山東省でも古くから民衆に愛されてきた伝統芸能なのだと思う。

『檀香刑』では、かつて中国を食い物にした、日本を含む先進国の中で、青島(山東半島の東部)周辺を植民地にしたドイツに抵抗運動を繰り広げて捕まった父親が、かつて「猫腔」の名手で多くの女を泣かせた、という娘の語りに出てくる。身内を含む多くの仲間が殺され、入獄している父を救うために百計を案じている娘の語りが出てくる「猫腔」がどういう芸能なのか、



私は知らない。ただ、二人転の話によく出てくるところから見て、山東省あたりで古くから民衆の間で支えられ、伝えられてきた民間芸能なのだと思う。ある日、これを中国帰国者2世で前に花見の話などにも登場した瀨瀨高志くんに聞いてみた。彼の父は二人転のブロ裸足の歌い手だが、詳しいことは知らない。

しばらくして高志君から電話で知らせてきた。「いま中国で最も多く利用されているインターネット検索「百度」で簡単な解説が出ている」という。 **茂腔(百度百科)**

「しかし猫腔ではなく茂腔で出ていますよ。」

私は早速この「茂腔」を検索した。『檀香刑』でも「猫腔」という言い方だが、内容は間違いなくこれだ。

いわく：「茂腔」は200年余の歴史がある。主として山東省東部の青島、煙台など数十の都市や農村でもてはやされている。早い頃は口語の歌詞で覚えやすく、楽器も簡単なもので、市民や農民に愛されてきた。その歴史や芸能としての特色、呼称のいわれ、国家としての評価など、詳しい解説がある。

しかし、莫言さんの小説でも「猫腔」という言い方なのに、ここでは終始「茂腔」であり、何故そうなのか、の説明はない。

それにしても莫言さんという筆名人を食っている。「莫言！（お黙り！）」と人を制しておいて、自分が書くものは実に多弁で、あの顔のどこからこれだけの饒舌と成句と比喻が出てくるのか、と思う。しかし国外に逃れてノーベル賞を受賞した高行健と写真を並べても、どこの大衆食堂のオヤジさんか、という風貌だし、北京大や清華大出身でないところも親しめる。初めはわからない単語を、いちいち辞書を引かなくとも、話の筋がわかればいい、と思ったが、この多弁で猥雑な文章に触れているうち、時間がかかっても、わからぬ言葉はすべて辞書を引いてやろう！という気になってきた。読み終わるにはもう一度、生まれ変わらなければダメかもしれないけど。

#### ④ 零下30度のロケーション—映画のヤマ場へ

一昨年の東北大震災3か月後に私たちが日本へ招いた中国残留孤児(厚労省は認定していない)徐士蘭さんと3女・丛会霞さんのドキュメント(映画)は、第2部(来日篇)を6月初ですべて撮り終え、編集に入る。これを9月末までに仕上げ、11月から12月にかけて、内内の試写会を計画している。そして来年1月の方正、ハルビンロケで撮影したものを第1部として編集、来春には第1部、第2部を合体し、一篇のドキュメントとして世に問う予定である。

では仮に便宜上、第1部、第2部と分けた理由は何か。ひとことで言えば、第2部は、様々なハードルを乗り越えて親子の来日が実現、新潟空港に第1歩を記した瞬間から、初めての祖国の山河、新幹線、厚労省との話し合い、支援者による激励会(東京と千葉)、西伊豆の民宿で富士山を見る…、そして新潟空港から中国へ、という映像で構成。そして第1部は、この訪日が実現するまでの、様々なハードルがどのようにしてクリアできていったのか、を現地の真冬という、リアルタイムで撮影し、構成する。

中国国内での訪日手続きは、まず方正県政府の外事弁公室へ訪日ビザ申請書類を提出す

ることから始まった。次に黒竜江省での手続き、今から振り返れば、徐士蘭親子にとって、零下30度の厳寒にハルピンまで片道164キロの道を何度も往復しなければならなかったこと、そしてそれ以上に、どの審査がどう進めば、いつごろOKが出るという見通しが全く立たない中での焦燥と徒労感の長い時間だった。後でそれが裏付けられたのが、黒竜江省外事弁公室・徐広明さんに関与してもらってからの手続きの進み具合だった。そして申請書類は瀋陽の日本領事館へ。実はこの話がスタートした頃、申請書類が日本領事館に回れば10日間ぐらいでビザの発給となる、という情報らしいものを得ていた。

## ■混沌の中での決断

実はビザの申請手続きを始める頃、どの窓口で所要日数何日間と大まかにビザ入手までの所要日数を計算し、訪日時期を桜の開花時期を3月末と設定していた。そのための滞在ホテル、千葉と東京で開催する歓迎パーティの会場その他の準備や予約ほか、細かい段取りをすべて進めていた。それが狂った。しかも何日間、後ろへずれるという食い違いではなく、ビザ発給の日時そのものがまったく分からなくなった。さらに不安が募った。ビザは果たして出るのだろうか。そこへ東北大震災である。

仮にいまビザが出た、といっても東北大震災の混乱がどこまで広がるのか、いつになったら落ち着くのか…だれも予測できない状況の中で私たちはビザを待った。発給の知らせが入ったのはそんなときである。有効期間6か月、その最終日時の前、2011年6月8日から17日までの10日間、を来日時期と決めた。その時点になって状況がさらに悪化したり、新しい障害が出たたりした時は、そこで判断しようと腹をくくった。

この期間の手続き、その裏事情、予測を超えた状況への対応…、その緊迫したドラマがこの映画の第1部であり、これまで2年間、日本と方正で撮影したシーンは、いずれも時期は初夏であり、徐士蘭さんが来日のビザを取るために厳寒のハルピンまで何回か通わねばならなかった、いわば「第1部」の撮影は「未了」のまま残されていた。それを明春1月の厳寒に行くことに決めたのである。

厳寒の方正往復はもっぱらこの映画製作のためだが、この時期、ハルピンでは有名な「氷祭り」が行われている。結氷する松花江がメイン会場で、対岸の太陽島公園や氷まつり発祥の地『兆麟公園』（対日戦争中の反日聯軍の英雄の名をとった公園）も分会场として多くの氷像が飾られるようだ。

厳寒の方正地区日本人公墓を参拝したいという方がいれば、もちろんご案内するが、ハルピンの氷祭りだけを見学したい、という方がおられたら別ページのご案内を参照していただきたい。

(おくむら・まさお：本会事務局参与)

# 石さんの特約情報

ハルピン養父母懇親会 事務局長 石 金 楷

## ■ 解放軍にいた日本女性

昨年12月13日から16日まで、日本の著名な日中友好の活動家で「ABC企画委員会」のメンバーである山辺悠喜子さん一行4人が731部隊陳列館を訪問、熱烈な歓迎を受けた。彼女は1929年1月10日、東京で生まれ、1941年、本溪鋼鉄会社で勤務の父親と合流。1945年の敗戦後、16歳の彼女は中国東北民主連合軍に参加、中国人民解放軍のメンバーとして中国人民解放戦争に参加した。

1953年日本に帰ったが差別を受け、就職もできなかった。しかし中日友好のために奮闘、1984年からは頻りに訪中して戦争被害者の調査を続け、大量の資料を集めて、その後の政府に対する賠償訴訟のために重要な準備をした。1992年「ABC企画委員会」ができると、「731部隊展」の全国巡回展と731遺跡の保護運動を準備、1993年7月6日、東京で初めて「731部隊展」を開いた。

731部隊跡を世界遺産に、という運動にも日中間を駆け回って力を尽くした。2011年7月9日には731部隊跡地で行われた「謝罪と不戦平和の碑」除幕式に参加した。

## ■ 朝日の石田記者

1月4日、5日、朝日新聞・瀋陽支局長、石田耕一郎氏ほか1名がハルピンに来られ、第26回ハルピン氷祭りのオープンセレモニー取材、731部隊陳列館を見学した。氷祭りを初めて取材した石田記者は、「ハルピン氷祭りのことは前から聞いていたが、実際に見て噂通りの素晴らしさを実感した。まるでおとぎ話の世界のようだ」とその印象を語った。この様子を「夜景に浮かぶ氷の城」と題して日本に紹介した。

「731部隊記念館」を見学した時は、写真を1枚1枚、実物を一つ一つ、直視。「中国の母の大きな情愛」展を見学したときは、展示の模様を詳しく取材された。

## ■ 矢口氏ご逝去

1月9日、当会は日本の「ABC企画委員会」代表、故矢口仁也先生のご遺族に哀悼の手紙をお送りいたしました。全文は以下の通りです。

「尊敬する矢口仁也先生のご遺族へ：矢口仁也先生が2012年12月23日に亡くなられたことを知り、深い悲しみを覚えます。ここで私たちハルピン市日本残留孤児養父母懇親会はご遺族に謹んで哀悼の意を捧げます。どうぞ悲しみが少しでも和らぎますことをお祈りし、お体を大事にされますようお祈りいたします。矢口仁也先生は数十年にわたり中日友好事業に力を尽くされ、人権を守り、正義を広げ、世界平和を広げるために、たゆまぬ努力をされ、多くの人々から尊敬されました。先生は平和を愛する日本の民衆の優れた代表であり、中国人民が永遠に忘れることのできない友人です。先生のご逝去は中日友好事業にとって大きな損失であります。私たちは先生の事業を受け継ぎ、先生の優れた仁徳に学び、世界平和と中日両国の世々代々の友好のために努力いたします。 矢口仁也先生どうぞ安らかに！ 2013年1月9日」

## ■ 田尻総領事から手紙と招待

1月19日、当会は駐中国瀋陽総領事田尻和宏氏から以下のような手紙をいただきました。

辞旧迎新にあたり、謹んで貴会が新年、すべてが順調に運びますよう、お祈りいたします。日中友好のベースは民間にあります。両国の国民の気持ちは些細なこと、日常の細かなことが、長い時間をかけて積み重なって、次第に出来上がって行くものです。貴会が長年にわたり、日本の民間の友好メンバーとの交流によって、とりわけ残留孤児の養父母と残留孤児という、この特殊な人たちの積極性を生かし、日中友好につないできました。貴会の事業は、両国国民の理解と友好のために、きわめて大きな橋渡しの役目を果たしてこられました。ここで私は謹んで貴会の活動に敬意を表するものであります。お便りによって知りましたが私は貴会が昨年、行われたさまざまな成果に対して祝福をお伝えするとともに、新年の事業についてもお祝いをするものであります。機会がありましたら私もハルピンへ伺って『中国の母親の大きな情愛』展を見せていただきたいと思います。今後ともお互いに連絡を密にし、絶えず連絡を取り合い、友情を深めてまいりたいものと思っております。

日本国瀋陽総領事館総領事 田尻和宏

なお3月27日、田尻総領事、吉池直樹経済領事、金聖姫経済補佐がハルピンに来られた。目的は日本政府が黒竜江省綏賓に医療施設を贈る、その契約セレモニーに来られたのだが、この日、当会の胡曉慧名誉会長と孤児の楊治国、そして私を晩さん会に招いていただいたものだ。田尻総領事は養父母懇親会が長年にわたる活動に感謝の意を述べられ、当会が民間の団体という特色を生かされて、これからも日中両国民の相互理解と友情のために活動していただきたいと述べられた。最後に田尻総領事は私たちの求めに応じ次のような書を書いてくれた。『ハルピン市養父母連絡会の長年にわたる貢献に感謝し、貴会の発展をお祈りします』

## ■ 零下30度の歴史検証

1月25日から27日まで、731部隊陳列館と当会は黒竜江省方正県の日本人公墓、中国養父母公墓、日本開拓団東北本部跡地、旧日本軍飛行場燃料庫と生き残り証人、学者、残留孤児などの現地調査を行い、重要な映像及び文字の資料を収集した。この調査、証拠収集の作業には方正県の郷土作家・郭相声先生、県華僑連合会の曹松先副主席、伊漢通村の劉庫先生の協力をいただいた。

調査スタッフは上述スタッフと同道、零下30度の厳寒の中、膝までの積雪を踏み分け、屋外調査、面接調査によって重要な第1級資料を得ることができた。野外の積雪が多く、人も車も通行ができなかったため、予定していた大羅勒蜜部落の当時、開拓団が遭遇した「死の河渡り」現場と天門郷飛行場跡地は調査できず、春を待つて再度、調査することになった。方正では郭相声、曹松先のお二人が友好交流のために役立ててほしいと、著書『黒土地托起的愛』、『藤原長作先生在方正』、『方通匪事』、『抗聯軍医鄧桂珍』など20冊余を贈ってくださった。

(訳 奥村正雄)

# 満州事変の導火線「中村大尉殺害事件」

高橋 健 男

## 1 生家跡に「中村震太郎記念館」開館

2011—2012 年は満州事変・満州国建国から 80 年ということで、ジャーナリズムや書籍等、関連特集がいくつも見られた。満州開拓団に関心を持つひとりとして、満州国建国から開拓団の送出につながる時代の一大変化を引き起こした満州事変に関しても知らないで過ごすわけにはいかない。

そんな気持ちで 1 年を終わろうとしているとき今年の 11 月 30 日、旧南蒲原郡中之島村（現・長岡市）の公民館で「ふるさと歴史講座」が開催された。主題に「殉国の士・中村震太郎」とある。1931



生家隣、蔵を利用した記念館

（昭和 6）年夏、内モンゴルの地誌調査に派遣されていた陸軍参謀本部付の中村震太郎大尉一行が奉天軍興安屯墾団の官兵によって殺害された事件が発生したというが、その中村大尉の生家が我が家（旧南蒲原郡新潟村）から車で 15 分のところにあり、生家に残されていた蔵を利用して昨年夏、顕彰会が常設記念館を開館したということを知った。

講演を聞いたあと早速記念館を訪問した。ちょうど、例年にない 12 月初めの大雪に見舞われた数日後のよく晴れた日であった。古い土蔵が二度の大地震（中越地震、中越沖地震）に見舞われ、内部の壁が崩れ落ちたのだという。それを片付け、収納品を整理していると、雑多な品々の中から膨大なる中村震太郎関係物品（掛軸、新聞記事切抜き、書簡・葉書、軍関係記録文書、その他）が出てきた。数年をかけて資料を整理し、蔵の内外を修理して、今夏展示・公開した。

地元郷土史家も加わった顕彰会では資料を読み解き資料目録の作成に努めているが、まだまだ作業は始まったばかりである。今後、研究者等が入ってそれぞれの文書の評価が行われると、ひょっとして本邦初といった軍関係資料の発掘につながることも有り得よう。

## 2 満州事変の発端「中村大尉殺害事件」とは

中村大尉殺害事件は 1931（昭和 6）年 6 月末に発生した。ところが、新聞発表は事件発生から 50 日間伏せられ、同年 8 月 17 日正午にようやく解禁となり、次の当局発表内容が新聞一面を飾った（句読点は一部筆者追加）。

参謀本部員陸軍歩兵大尉中村震太郎氏は、元騎兵曹長井杉延太郎及び露国人、蒙古人各 1 名を従え、支那官憲発給の護照を携行し、6 月上旬、中東鉄路西線博克図駅付近を發し、済泌川上流区域、蘇鄂公爺府を経て洮南に向かい旅行し、6 月 27 日頃、洮索地方蘇鄂公爺府（民安鎮）に達し、同地飲食店に立ち寄り喫食中なりしが、同地駐在奉天軍興安屯墾隊第三団所属の官兵は突如これを襲い、護照を提示せるに拘わらず不法にも引致、監禁し、所持せる金品、護身用ピストルその他貴重品いっさいを略奪し、なんらの理由なくついに銃殺するに至れり。7 月上旬以来我が方においては極力調査を進め、その真相を確認し得たるをもって、支那側に対し嚴重抗議し、陳謝、損害賠償、責任者の処罰、将来の保障等につき交渉を開始することとなれり。

中村大尉一行が捕縛された蘇鄂公（爺）府は民安鎮とも言われ、現地にはわずか 40 戸

ほどの現地民が暮らしていたところである。そこに奉天政府が屯墾隊第三団の兵約 600 名を派遣して開発に当たっていた。この地方一帯は森林・鉱物等の資源等、天然の宝庫と言われていた。そこは興安街北方で南東には葛根廟がある。洮南は平斉線（四平一齊齊哈爾間）の白城子南約 35 キロである。

中村大尉事件発生の 10 数年後、興安近辺に日本の開拓団、東京都送出の第 12 次仁義仏立開拓団と第 13 次興安東京荏原郷開拓団が入植している。日本敗戦時の開拓団避難民は興安から白城子を目指しての避難途中、多大な犠牲者を出した。東京荏原郷開拓団は双明子の麻畑でソ連軍戦車に囲まれて執拗な攻撃を受けた結果、服毒、自刃、敵弾に倒れる等で 400 名近くを失った。仁義仏立開拓団は洮南西方約 20 キロの地点でソ連軍機動部隊の襲撃を受けほぼ全滅した。興安街邦人避難民は、一部白城子北方の泰来に逃れたものがあったが、多くは葛根廟付近の草原でソ連軍戦車にひき殺されるという残虐な最後（＝葛根廟事件）を遂げている（位置関係は後掲地図を、開拓団関係の逃避行顛末は会報 15 号に会員・宮下春男氏の詳細な検証が報告されているので、そちらを参照されたい）。

さて、中村大尉事件は「日本の現役軍人が支那軍隊のために殺害された未曾有の事件」である。しかし、中国側（奉天政府の張学良、南京政府の蒋介石）との交渉は紆余曲折が続いた。それがために国内では軟弱外交に対する不満の高まりがあり、軍の実力行使への期待や滿蒙問題の一挙解決への期待が増幅された。中国側においては殺害の証拠隠滅や事実の否認、事件解決努力の遅延等があり、一方庶民の抗日姿勢高揚への策が講じられるなど、日中双方心理的に一触即発に近い状況が生まれた。

滿州に流入していた朝鮮人と現地中国人との争いも発生し（＝長春南約 30 キロ地点の小村で起こった万宝山事件）、朝鮮においても滿州においても両者の関係を解決しなければならない問題も継続していた。中村大尉殺害事件の解決も延び延びとなり、中国側が非を認めたのが 9 月 17 日であった。主犯である屯墾隊第三団団長代理・関玉衡の逮捕・軍法会議開催と解決のための最終段階の入口に入ったとき、柳条湖事件（＝九・一八）が勃発した。

それゆえ、中村大尉殺害事件は「滿州事変の発端」とされたとはいえ、当時の状況はそんな単純な図式で説明できるようなものではなかった。後述のごとく、事件解決への抗争が実にうまく事変につながるよう“活用された”と言って良い。

### 3 中村震太郎の人となり

中村震太郎は 1897（明治 30）年 7 月 14 日、新潟県南蒲原郡中之島村大字中条（現・長岡市）の農家に生まれ、同村の小学校を卒業。1909（明治 42）年、12 歳になったとき、卒業小学校長の推薦で隣町（現・見附市今町）出身の東京帝国大学医学部教授・入澤達吉（1865－1938、元大正天皇侍医頭）邸に書生として入り、勉学に励んだ。

1916（大正 5）年 12 月、順天中学校卒業後の中村震太郎は陸軍士官学校試験に合格、士官候補生として高田歩兵第五十八聯隊に入隊した。1919（大正 8）年 5 月、陸軍士官学校を卒業、同 12 月、陸軍歩兵少尉となり、高田歩兵第五十八聯隊付となる。1920 年、シベリア出兵に参戦、チタ付近で 6 回以上の戦闘に参加。勲功により勲六等旭日章に叙せられる。

高田歩兵第五十八聯隊勤務中、聯隊長であった羽入三郎少将（当時は大佐）の一人娘・信



中村震太郎・信子墓

子と結婚、長男<sup>ただし</sup>義をもうける。しかし夫人は、震太郎が陸軍大学校を卒えた頃、幼い長男を残して病死した。震太郎は妻の墓を建てるとき、自らの名も刻んでいる。生家菩提寺に立つ墓を参拝すると、この時から 5、6 年後、自らの殺害が予告されていたかのような錯覚に陥る。震太郎はその後、1929（昭和 4）年、東京・牛込区の軍人・師岡一夫の妹・幸子（21 歳）と再婚、震太郎死去時生後 2 ヶ月であった長女・泰子<sup>たい</sup>が生まれている。

1922（大正 11）年 12 月、歩兵中尉に任命される。1925（大正 14）年 1 月、陸軍士官学校本科生徒隊の指導を担当した後、12 月、陸軍大学校に入学した。陸軍大学校卒業後の 1928（昭和 3）年、高田歩兵第三十聯隊中隊長となった。33 歳になった 1930（昭和 5）年 8 月 1 日、陸軍参謀本部付を命じられる。

1931（昭和 6）年 4 月、対ソ戦のための内密調査（＝軍用道路・給水源等の調査）の命を受け、満州へ出張。各地を旅行中の 6 月 27 日、奉天軍官兵に逮捕・監禁され、殺害された。享年 35 歳。具体的な状況は次項に譲るが、当時の新聞を繰ってみるとこの旅行中の便りが 3 通、「絶筆」として紹介されている。

1 通は弟宛である。弟・謙次郎はこの頃高田中学校の生徒で、現在の上越市にいた。下宿に「ハルピンにて震太郎、5 月 19 日。明日西に向かって出発する」と記された葉書が残されていた（東京日日新聞、昭和 6 年 10 月 2 日付）。2 通目は内モンゴルを案内してくれた<sup>こうこうけい</sup>昂昂溪の日本旅館主人、元騎兵曹長の井杉延太郎宛（同、昭和 6 年 9 月 9 日付）。井杉延太郎は佐渡郡相川町出身の新潟県人、他にも大尉殺害事件では新潟県人が関わっているのは奇遇としか言いようがない。手紙は 5 月 29 日付で、直前に森赴大尉の兵要地調査の道案内に行っていた（『太平洋戦争への道』）井杉曹長に、引き続いて自分の案内方依頼を確認した内容である。震太郎は 6 月 2 日にハルピンを発っているの、その直前に投函された手紙であろう。

3 通目は妻に宛てたもので、夫の死が伝えられた日の夫人談話の中に手紙に関するところがある。幸子夫人は、「主人は 5 月 10 日、私がまだお産のため休んでいました時、『満州方面に行ってくる、7 月初めまでには帰る』と言い、余り語らないで出発しました。その後 6 月 6 日付でチチハルから手紙が来ました」と述べている（同、昭和 6 年 8 月 18 日付）。井杉延太郎と落ち合い、いよいよ地誌探索に出向くときの手紙である。これは、殺害される 20 日前のもので、夫からの最後の便りとなった。

先妻の父・羽入三郎陸軍少将に「故中村震太郎を語る」という文章がある（記念館蔵）。1937（昭和 12）年、殉難現地に近い旧<sup>りゅうこう</sup>龍江省<sup>とうなん</sup>洮南に「殉難烈士之碑」が建立されたが、これはその基金集めのための依頼文書に添付された文章であると推測される。岳父・羽入三郎少将は、中村震太郎の人となり「不言実行、躬行率先」の心情の持ち主と紹介する。そしてそのことを奉天特務機関長・土肥原賢二少将が昭和 6 年に帰国して義父に語った次の言葉として紹介している。土肥原少将は中村震太郎が高田聯隊で中隊長であった時の聯隊長であった。こう語ったと紹介されている。

中村が陸軍大学を出て高田聯隊に帰った時、私は彼を聯隊中でもっとも成績の悪い第三中隊の隊長に任命したのです。第三中隊は射撃をやっても剣道をやっても、一番劣っていました。外出すれば必ず事故を起こすという中隊でした。ところが中村が隊長となってからというもの、彼の躬行主義を徹底した結果、全く掌を返すように一変して射撃では聯隊随一となり、剣道では師団中第一位、外出しても事故一つ起こさないということになった。これは全く彼の人格からあふれ出た不言実行躬行率先主義教

育の効果のためで、全く感謝するほかはなかった。

また、羽入三郎少将は中村震太郎の満州入りから死去までを次のように語る。肉親の情とともに軍人らしい語り方、満州事変を経て満州国建国がなった頃の軍人としての姿勢を感じさせる。

洮南<sup>とうなん</sup>からハルピンを経由して海莞爾<sup>ハイワラル</sup>まで東支鉄道の便を利用し、そこから内蒙古の難路を歩き、広漠たる原野を横切って索倫<sup>そろん</sup>を通過して南下しました。獰猛な野獣や馬賊の危険を冒し部下はわずかに井杉延太郎と他にロシア人一名、蒙古人一名と、馬二頭に露営用具を積んで、洮南を目の前にして、重大使命の大任を果たせる日が近いことを喜んでいました。しかし天は命を助けず、畜生にも劣る中国官兵に捕まり、悲しいことに虐殺されることとなりました。思えばまことに残念無念です。言うべき言葉さえ出てまいりません。

しかし、中村震太郎一人の死が事件の発端となって、今まさに満蒙が我が国の手に収められようとしていることを思うと、私たちの満足は申すまでもなく、彼も地下でニッコリ笑って瞑目していることと信じています。

事件判明後中村大尉は少佐に昇進、遺骨も送還され、郷里の墓地に安らかに眠った。

## 4 事件の真相

### (1) 事件を語る重要資料

中村震太郎大尉の内モンゴル・興安<sup>こうあん</sup>地方の探索の足取りや殺害事件発覚の経緯、事件解決までの日中双方の駆け引きなどの具体的なことは、満州事変関連お研究所ほかいくつもの資料によってほぼ明らかにできる。

特に片倉<sup>まこと</sup>衷元関東軍参謀・少将の『回想の満洲国』や「中村震太郎大尉殺害の真犯人」(『目撃者が語る昭和史』第3巻)に興味を惹かれる。また、内モンゴルの研究者による論文「中村事件」(科尔沁右翼前旗誌、『嫩訓八洲だより』45号に訳文所収。「嫩訓」とは満蒙開拓青少年義勇軍の現地訓練所の一つ嫩江<sup>のんこう</sup>訓練所のことで、『たより』は嫩訓終了者の戦後の親睦会の会報)を発見、今までの国内研究書にはない内容が記されていた。そして当時の諸文書類を駆使した関寛治「満州事変前史」が、中村大尉事件を含め当時の関東軍並びに日本政府内での諸状況の学問的追究を提供する。加えて、当局からの事件に関する公式発表後に現地に入った東京日日新聞記者の調査記事(昭和6年9月8日付)が内容照合・確認のために役立つ。

元関東軍参謀の片倉衷少将手記の重要性は次の点にある。中村震太郎大尉は対ソの主決戦方面及び興安屯墾地区の作戦資料の蒐集という秘命を帯びて昭和6年5月に渡満したが、偵察準備を終えた5月下旬、陸士・陸大で同期だった旅順<sup>りょじゆん</sup>在住の片倉宅に一泊している。親しい間柄であり、偵察内容について当然両者は確認しあったであろう。また、殺害事件は確認できているものの銃殺の証拠を確保できていなかった奉天特務機関は秘密裏に調査隊を現地に派遣したが、そのとき片倉大尉(当時)は中国人に変装して現地に入り、中村震太郎の間諜行動路線に沿って秘密調査している。手記に添付されている地図(後掲参照)はこの時の調査結果からのもので、中村震太郎の足取りを正確に表していると思われる。

なお、地図に関しては6月6日付の幸子夫人への中村震太郎葉書にも概略図がある。まだまだ軍事郵便の扱いが始まっていない時期なので家族への手紙に地図の記載も可能であったのかもしれないが、密命での偵察旅行ということから考えれば地図の記載は少々問題かもしれない。東京日日新聞新潟版(昭和6年10月2日付)に掲載されているその葉書の写

真を片倉手記に添えられた地図と比較すると、非常に似通った線路図であることがわかる。ただし、新聞掲載写真は残念ながら鮮明度が弱く、詳しい照合は不可能である。

内モンゴルの研究誌に掲載された論文は、その中に新聞や日本側資料では触れられていない内容がいくつもあり、これも事件の真相に近いものと考えられる。例えば、中村大尉逮捕に至る理由を「日本側間諜と確認」したからと説明する。それは所持品から明確であるとして、興安屯墾軍が押収した物品を次のように羅列紹介している。その中には探索・偵察内容が詳しく書かれた手帳 2 冊、報告用綴じ込み冊子 3 部も含まれている。この一覧により同道した日本馬 3 頭、蒙古馬 1 頭、所持していた三八式騎兵銃 1、望遠鏡 1、測量版・測量竿 1、標鎖一式、製図板 1、方円羅針盤 1、寒暖計 1、天幕一式、雨具一式、衣服、缶詰食品等、すべてが押収されたことがわかる。

いずれにせよ中村大尉らが探索した洮索線（洮南—<sup>ソロン</sup>索倫間）沿線は、中国側が日本人の立ち入りを禁じていた地区である。だから中村震太郎は、ハルビンにて護照（特別に入境を許可するという査証）を受けていた。ただしこの時、身分は「東京黎明学会主事・農学士中村震太郎」と偽証していた。

## （2）中村大尉一行の足取り判明

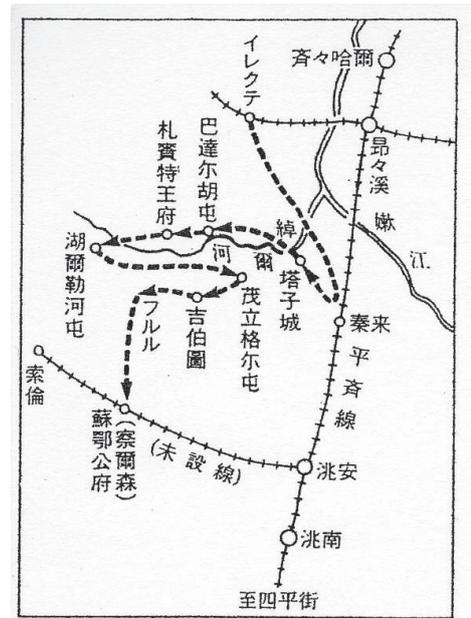
昭和 6 年 6 月 2 日にハルビンを発った中村震太郎は、チチハル南方の昂昂溪<sup>こうこうけい</sup>で同地の日本旅館昂栄館<sup>こうえいかん</sup>主人・井杉延太郎を道案内に伴い、さらに通訳として白系ロシア人・シロコフ、蒙古人をそれぞれ雇って壮途についた。姿は支那服をまとい、馬 4 頭に旅装を整え、出発は 6 月 6 日であった。前述のとおりこの 6 月 6 日、中村震太郎は妻・幸子に手紙を送っている。その後 6 月末になっても帰還予定地・洮南<sup>とうなん</sup>への中村大尉一行帰着の報がなかった。7 月 3 日頃には不吉な噂が立ち始めた。

管轄のハルビン特務機関は機関員をチチハルや洮南へと派遣し、捜査を開始した。この頃対ソ作戦計画研究のための数回に及ぶ関東軍参謀旅行が実施されている（『太平洋戦争への道』）。例えば、7 月 3 日から 14 日の 12 日間、そこには片倉衷も参加しており、

「6 月下旬から 7 月中旬にかけて関東軍司令部の板垣征四郎大佐、石原莞爾中佐等の一行が、ある研究演習のため、チチハル、海拉爾、満州里方面に視察に出向いていたが、筆者も一行中の一員として同行、各地で中村一行の消息を尋ね歩いた」（片倉手記）という。事件からそう時間を置かずして片倉衷は、秘密裏の捜査を行っていたことになる。

中村大尉一行行方不明、あるいは殺害されたいという報告は 7 月 6 日、陸軍中央部に打電された。奉天特務機関、奉天総領事は中国側軍権及び政権に交渉の上、中村大尉一行の捜査を依頼した。日本側も独自に捜査班を派遣、7 月 20 日には一行の経路を発見した。そこで片倉衷は 7 月 25 日、支那服に着替えて洮南に密行した。片倉衷は数組の間諜を使って徹底捜査を開始した。加えて全満の日本側諸機関の協力のもとに周密な捜査が展開され、日本側は証拠を含めて真相を把握した。

中村大尉一行は 6 月上・中旬、泰来<sup>たいらい</sup>付近を偵察後、札賚特王府<sup>ジャライ</sup>に向かう。旗（= 県）公



中村大尉調査・移動経路図

署訪問の際、公署の蒙古役人は「察爾森方面の屯墾軍は排日気分が強く、危険だから引き返せ」と勧告した。しかし一行は西進を継続した。

6月25日、馬賊討伐に出動した屯墾第三団の一部隊に遭遇、一行を馬賊と思い追跡される。難を避け、察爾森、別名蘇鄂公府に向かう。第三団監視所の衛兵が一行の南進を認め、「東方山坡の道路上に乗馬兵4、5人見ゆ」と報告が上がる。報告を受けた衛兵司令屯墾第三団第四連長は、一行の拉致に向かった。一行はこれを知らないまま三団街に進み、三合居飯店で休息していた。一行はそこで捕縛され、兵営にて身体検査、所持品のすべてを押収された。

6月26日、尋問が継続される。「司令・関玉衡<sup>かんぎょくほん</sup>は兵に命じて一行4人の口に綿花をつめこみ、縄で脛を縛り上げさせた。それから革鞭でピシピシと半時間ばかりも打ち続け、皮は破れ、肉もむき出しとなる無残な姿であった」と片倉手記にある。関玉衡は尋問後兵に命じて、一行を蒙古王府に連れて行くことだまし、団部東方2支那里の地点に押送させた。その東山溝で4人は銃殺され、その上石油をかけて屍体は焼却された。後日談であるが、井杉延太郎夫人・かよ子（40歳）は真相がわかったあと、悲しみの中で次のように話した（東京日日新聞、昭和6年9月8日付）。

主人は年4、5回奥地へ旅行していました。それでも何時も無事に帰ってきたのに、今回は帰ってきませんでした。尤も馬賊の多い奥地のことであり、何時どんなことがあるかもしれぬと、かねて主人が申ししていましたが、やったのは馬賊でなく支那の官兵だと聞いて、本当に口惜しくてなりません。主人はともかく、中村さんがお気の毒です。中村さんは主人より半月程度前に奥地に向かわれ、主人は丁度6月4日の夜、中村さんと東支鉄道西武沿線伊勒克特で落ちあう約束で出発しました。主人も中村さんと同じ新潟県の生まれというのが不思議な縁です。

井杉延太郎は長年昂昂溪に居住し、ロシア、中国、モンゴルの3カ国語に明るく、内モンゴル方面の地理に精通しているので常に来訪者の道案内に立っていた。自身は興安嶺<sup>こうあんれい</sup>を3、4回踏破したことのある、この地方の地理や諸事情を熟知している人物であった。かよ子婦人も諸状況に通じていたので7月10日頃、参謀旅行中の一行が昂榮館に立ち寄った時、「1ヶ月近く連絡が取れないので、旅順帰に帰ったら軍の配慮を頼む」と搜索の依頼をしていた。

### (3) 端緒、異説

内モンゴルの研究誌や新聞記事には片倉手記や国内研究書とは異なる興味深い説明がある。いずれが真相かは筆者に何ら確証はない。

#### ① 事件発覚経緯

銃殺、屍体焼却の物的証拠隠滅を図った関玉衡<sup>かんぎょくほん</sup>は、片倉衷調べでは、「関団長は布告を發して、『今回のことは極秘だ。各連長は部下に伝え、絶対に外部に漏洩してはいけない』と厳命」という。ところが、以下のようなことから事件が発覚した。

中村大尉一行は黒龍江紙幣で3千元所持していた。分け前の大小に不満を持った兵が某所で殺害事件のことを漏らした。中村大尉の護身用ピストルを処分せずに自分のものにした団長が打ち方を知らずに困っていること、兵の一人が密かに奪った中村大尉の金時計を隠し持っていることなどが漏れた。これらは中国人の妻になっていた日本の一女性からだたとされる（東京日日新聞、昭和6年9月8日付）。

「大尉を虐殺せる団長は大尉の品物及び金を取り、20円ずつ下手人に配った」（東

京朝日新聞、昭和6年9月9日付)——押収した金の分配があつたらしい。

「昂昂溪旅館主人井杉氏が数年前、洮南の奥地で店を開いている某支那人にある女性を世話したが、事件直後、数名の駐在兵が同店を訪れ、日本人の一行を隊長の命令で銃殺し、現金3千元とピストルを奪ったが、ピストルの使用法が分からぬと語った」(同、昭和6年9月3日付)

金の腕時計を隠し持っていた男は博打好きで、それが大興質屋に渡った。別の兵がそれを手に入れ、朝日旅館で遊女をはべらせていたとき口をすべらせ、中村大尉ら4人が処刑された状況を吐露した。遊女は植松菊子(中国屯墾軍将校の情婦との伝もあり)といい、偶然新潟県出身だという。彼女が即この重要な情報を特務機関に報告した。二人の遊女の一人は川島芳子だった(内モンゴル研究誌)。

## ②捕縛・連行、殺害の状況

洮南に近づきほっとした気持ちになっていた頃、「蒙古犬のけたたましい叫び声、突如数発の銃声と共に一隊の騎兵隊が夕闇をついて走るのを見た一行は、これを馬賊の襲撃だと思ったので、夕闇に馬を走らせて部落の方へ逃げ込んだ。そこは野獣のような兵隊街であった。一行が馬賊と思ったのは実は討伐隊の一隊であった。」(東京日日新聞、昭和6年9月8日付)

『リットン報告書』によれば、中村大尉が所持していた護照には特別地域通行の追加記載がされていたが、その際農業技師と身分を偽っていたこと、屯墾軍は護照は無効であるとして取り合わなかったこと、一行が多額の旅費を持っていたこと、他に測量機、地図、日記帳などから軍事スパイと判断したこと、違法薬物、麻薬を所持していたこと等のことから捕縛・殺害されたとされている。

「6月27日、ちょうど部落に祭りがあって、中村大尉と井杉延太郎の二人は馬をつないで祭り見物をした。そのうち蒙古人が二人の馬を見て騒ぎ出した。中村大尉らは日本の軍馬に乗って出かけたので不審を買い、兵舎に連れて行かれた。調べに出てきたのが偶然にも、中村大尉と陸軍士官学校同期の関玉衡中佐だった。懐かしく握手を求めてきた関だったが、中村大尉は手を払い、洗面を作り横を向いた。さらには腕をとって背負い投げに投げつけた。関中佐は激怒し、部下に命じて殺害した。」(インターネット検索より)

森克己『満洲事変の裏面史』は、異説のほとんどは「信用できない」とする。

## 5 事件解決への攻防と満州事変

### (1) 日中の攻防・かけひき

事件勃発、殺害事実発覚後、上述のように日本側の独自捜査が行われた。いくつかの証拠を得た日本側は、「中村大尉一行の殺害は不正なもので、日本軍や日本国民に対する侮辱である」と主張(『リットン報告書』)、奉天総領事・林久次郎が東北政権渉外署へ、奉天陸軍特務機関長・土肥原賢二大佐からは東北軍憲へ強力に抗議し、解決を迫った。一方、中国側は初めは「事実無根の浮説」と取り合わない。「中村大尉が逃走を企てたため歩哨に射殺された」との主張(同)をしたり、日本側の詐称とか口実を設けて捜査を引き延ばしたり、そしてその間に証拠の隠滅も画策した。

そこで8月8日、陸軍中央部は関東軍中心の交渉を打ち切らせ、外務省は南京政府への交渉を促進し、威力搜索計画も中止させて8月17日、前述のとおり、事件の真相を発表した。真相が発表されるや、満州在住の日本人のあいだには対中国強硬論が湧き上がった。

当時満鉄の職員であった森山誠之はその頃の在満邦人の雰囲気や NHK 取材班に次のように語っている（『張学良の昭和史最後の証言』）。

ここまで来ると、一触即発ですね。結局だんだん圧迫されて、座して死を待つよりほかしようがない。そこで、全満の邦人が決起して、『軍は何をしているんだ』と、関東軍に対する激励というか要望といいますか、そうした声が当然上がってきます。『関東軍はこれだけやられて、一体何をしているんだ』とね。

事実、柳条湖事件の前日の 9 月 17 日の新聞は、まだまだ「依然軍部は強硬の態度／陸相閣議に発表か」と報じている。閣議では、「満蒙諸問題の解決は至難であって一朝一夕によく解決し得べからざる問題であるとして放置するにおいては、我が特殊権益は日一日と失われてゆくは勿論、中村事件の如き不祥事の頻発することは過去の長い歴史に徴しても明らかである故、この際万難を排して断固解決するべきことに意見一致」した。片倉衷は「中村事件と輿論の高潮」と見出しをつけて、「かくて満洲問題解決の声はにわか高潮していったのである」（『回想の満洲国』）と内外の状況を詳述している。

世論の盛り上がりは中国側においても同様で、張学良は血気はやる青年たちに対し、「日本側の態度は我汚辱となると少なからざるも、この際事を起せば徒らに日本側に乗せられることとなるを以て、臥薪嘗胆、妄動すべからず」と諭している（東京日日新聞、昭和 6 年 9 月 18 日付）。一方で東北憲兵司令部は官兵による中村大尉殺害の事実を是認、責任者である洮索地方屯墾兵第三団長・関玉衡の身柄を拘束、軍法会議での査問を決定した。ただ、関玉衡自身は「中村大尉一行虐殺事件の犯人は部下にあったとは認めるが、自分は中村大尉処刑を文書でも口頭でも命令した覚えは絶対ない」と関与を否定した（同）。これらは 9 月 18 日の報道である。

満州事変の国連調査団の『リットン報告書』は、「シナ官憲は 9 月 18 日の午後に開催された正式会議で、奉天の日本領事館官憲に対して、シナ兵が中村大尉の死に対して責任があることを認め、またすみやかに事件が外交的に解決されるようにという希望を表明、中村事件解決のための外交交渉は 9 月 18 日の夜まではうまく進展しているように見えた」と述べている。事実、中国側の全面的承認によって両国政府の交渉は次の段階に移るところだった。

## （2）「発火点」を越す

一方、外交的事件解決とは別に、関東軍では早くから満州事変に突入するための諸準備がなされていた。張学良による満鉄並行線の建設や葫蘆島築港は満鉄や大連にとっては大きな脅威であり、したがって「このまま満鉄が枯渇して日本が満州から撤退するか、それとも、中国が日本に屈するのか、ふたつにひとつのぎりぎりの状況に来ている」死活問題と感じられた。また、中国民衆の排日運動は関東州の返還や満鉄の回収までもを叫ぶようになっていた。両国のナショナリズムは、満州において真っ向からぶつかることになった（『張学良の昭和史最後の証言』）。

陸軍は 1931（昭和 6）年 6 月 19 日、「満蒙問題解決方策大綱」を作成、この中では、張学良の排日方針を緩和させることができなければ、軍事行動もやむを得ないと結論づけていた。いやもっと言えば、陸軍内には張作霖爆殺事件（昭和 3 年 6 月 5 日）以前から満蒙領有主張がくすぶっていたし、「満蒙は 10 万の血で獲得したのだから、日本のものにするのは当然」といった感情論が根強く流れてきていたのである。ここで二人の重要人物の証言を確かめたい。中村震太郎と直接の関わりを持っており満州事変に至る諸事情に通じてい

た元関東軍参謀・片倉衷陸軍大尉が当時の奉天総領事・林久治郎との対談（『太平洋戦争への道』付録）の中で事変勃発直前の状況を次のように証言している。

当時のシナの情勢、引き続く満州の情勢が切羽詰ったところまでずっと盛り上がってきた、そこへ火をつけたか、つけんかはあとで申しますが、リットン報告の言葉で言うならば「発火点」ギリギリまでできておった。なぜそこまできたときに武力的に解決しなければならなかったかという、一つは外交交渉に対する軍部その他の不満があったということです。

対談者の林久治郎奉天総領事も、「日本の外交は満州が主なる外交であるのに、いよいよもって消極的になっていった。日本の満蒙権益はますますすぼまるばかりで、軍部には非常な不平がわだかまってきた」としている。当時の奉天特務機関員・花谷正陸軍少佐は次のように説明する（『文藝春秋』にみる昭和史）。

長い年月にわたる中国の排日、張学良が奉天政権となって以来の満州全土にわたる侮日、日露戦争以来満州在住の父子二代の日本居留民は日常生活を脅かされ、日本政府の温和政策を非難し、日本内外物情騒然たる世相が続き、このままではとても収まるまいとは国民の勘で想像されていた。

このような状況の中で発生した中村大尉事件の解決に向けての両国のつばぜり合いと、関東軍の独自の判断に基づく柳条湖事件の勃発が偶然重なったのであろうか。いや、板垣征四郎・石原莞爾コンビは、諸事の進展を満蒙問題解決の「好機」と捉えて推移を見守っていた。先の片倉衷はこれに関して、「当時の軍の考えとしては、武力的に一举に解決する以外に策はない。その根拠になった一つは石原莞爾中佐のいただいた対米、対ソ、対支関係の戦略思想です」と証言している。

板垣・石原コンビの下では独自の「挙事計画」が立てられていた。そして7月上旬の参謀旅行中に石原莞爾は「関東軍満蒙領有計画」の具体的提案をしていた。中村大尉事件は「付属地外出兵の好機会を与え、ひいては柳条湖での武力行使の前提事件となりうる」「武力行使を行う準備行為」と考えていた（『太平洋戦争への道』）。しかし、9月27日の挙事計画は大本営に知られるところとなった。参謀本部作戦部長の建川美次少将が中止説得役として渡満すると電報を受けて、関東軍司令部内では決行か中止かの岐路に立たされた。9月16日夜、板垣征四郎大佐のもとに集まった面々は、味方をも欺いての9月18日の決行を決めた（『満州事変の裏面史』ほか）。

昭和6年は6月末から7月初旬にかけて日中関係がもやは外交機関によって制御し難いほど危機的状況を示し始め、中国側も早晩日本軍による武力行使を予測していた。これらの状況の中で中村大尉殺害事件が、板垣・石原コンビらによって満州事変の“導火線”に、満蒙問題解決の“道具”にされていった。真実に一番近いと思われる片倉衷手記は中村大尉殺害事件の結末を、「かくて満州問題解決への世論は翕然<sup>きゅうぜん</sup>として朝野に盛り上がったが、時たまたま9月18日、柳条湖事件の突発、引き続く満州事変への進展は、関玉衡も逃亡し、屯墾軍は兵匪と化して、逃避散逸するに至った」と記している。ただし『リットン報告書』は、「結局、屯墾軍第三団長・関玉衡は死刑に処せられた」と記録している。いずれが真実か、筆者にはわからない。

## 6 盛大な葬儀、涙さそう遺児

「日本の現役軍人が支那軍隊のために殺害された未曾有の事件」であった中村震太郎大尉（少佐に昇進）の葬儀は、満州事変に突入したあとの世情の中で盛大に執り行われた。

陸軍葬は軍人会館である九段会館内のかいこうしや偕行社前広場において9月27日に举行された。南陸相、金谷参謀総長、若槻首相代理ほか主だった軍関係者、政府・各国大使・公使館付武官、参謀本部員、陸軍省員及び士官・幼年学校生徒、在郷軍人代表はじめ一般参列者、総計2万人を超す盛大なものだった。葬儀を報じる東京日日新聞（昭和6年9月28日付）は、「時折雨の降り注ぐ中をお祖父さんの羽入少将に伴われた義君（7つ）を真っ先に中村少佐未亡人幸子さん、井杉氏未亡人かよ子さん——などが、いとけない遺児を伴われて涙新たに午前8ごろ遺族席についた」と遺家族の姿を報じている。

大祭殿は大村益次郎銅像前にしつらえられ、両氏の写真が薄暗い祭壇上に輝いた。各方面から贈られた榊や生・造花が所狭きまでにその周りに飾られた。国民の満蒙問題に対する世論高揚に利用しようと桜会メンバーの血染めの大弔旗「弔英霊」も漂う。荘厳の中葬儀は進み、遺族を代表して羽入三郎少将が挨拶を述べ、同日10時に式が閉じられた。金谷参謀総長弔辞は次のとおりである（新潟毎日新聞、昭和6年9月28日付。□は判読不能文字）。

参謀本部部員陸軍歩兵少佐中村震太郎君及び参謀本部付井杉延太郎君等一行は裏に重命を帯びて興安嶺地方に赴き、任務の大半を終えて洮索の野に至るや不法にも民國官兵の暴挙に会いて終にその毒手に斃る。悲痛壯絶學国是を慨せざるはなし。中村少佐は安祥の資精□恪□苟めにもせず、然も事に臨みて勇邁遂げずんば止まず、洵に得難きの材。前途大いに望みを囑せらるる井杉君は豪侠の質□満茲に十数年幾度か陰難を踏みて國軍のためその効少しとせず。両君今や兇刃のために忽然として玉碎す。追悼愈々切にして愛惜更に深し、情迫りて復言う能わず。唯だ同胞義憤の発する所烈日の如くあり。以て英魂を慰むるに足らんか、在天の靈希くば来たり亭けよ。

井杉延太郎曹長夫人・かよ子は陸軍葬の後、9月29日、遺児・延寿（10歳）、保（7歳）を伴って夫の郷里佐渡郡相川町に遺骨を届け、10月2日、親戚知己多数が参会して葬儀が行われた。葬儀後は自分の故郷、長崎県南松浦郡でしばらく過ごした。実兄や遺児に囲まれての移動中、面やつれながらもしっかりとした語調で記者に次のように語った（新潟新聞、昭和6年10月6日付）。

2日に夫の葬式をすまして私の郷里長崎に立ち寄り、また満州へ帰るようになるかもしれません。将来のことですが、この子供たちを実家で育ててもらって私は再び昂昂溪で夫の遺業旅館を経営することにしようと思っておりますが、未だしかとは定まっていません。長崎の実家でいずれとも決めましょう。

陸軍葬の一週間前、9月20日には、日比谷公会堂で在郷軍人会及び東京府联合会主催のもとに慰霊祭が開催された。追悼演説会は「打倒暴虐支那」の一大国民運動が巻き起こる恐れがあるということで禁止指示が出たらしいが、記事（東京日日新聞、昭和6年9月22日付）では、「参加在郷軍人1万2千名は国旗を先頭にかざし進軍喇叭勇ましく会場へ練り込み、先ず追悼演説会開催、その後慰霊祭が行われた」と報じている。

中村震太郎の葬儀は多くの場所で執り行われた。新聞報道で拾うと9月23日長岡市千蔵院、9月27日新潟市白山公園昭忠碑前、10月2日上越市高田別院と続いた。最も盛大だったのは、郷里中之島村で行われた村葬である。



碑文拓本と中村震太郎胸像（記念館内）

村葬は10月9日午前10時半より、菩提寺長善寺本堂において執行された。午前10時自宅出棺、棺の中には中村少佐が最後を遂げる前に下宿屋に残していた古シャツ1枚が入られていた（新潟新聞、昭和6年10月10日付）。自宅から100メートルちょっとの菩提寺まで故少佐の写真を先頭に、参列の遺族・親戚にまもられて粛々として式場に着く。中央からは参謀総長代理で広瀬陸軍少将が、県内外からは県知事他主だった役職者が参列した。地元紙のひとつ、新潟毎日新聞は「香煙も悲し中村少佐の村葬／一千余名参列して悲憤の涙を絞る」と見出しをつけ、遺族席の写真を掲載している。そこには幸子夫人、長男・義（7歳）、長女・やす（1歳）と共に震太郎の父・六平次、母・やい、弟・謙次郎、妹・りん、たか、みわ、あき、かなの姿があった。

岳父・羽入三郎少将は満州国の殉難現地に慰霊碑を建立すべく、趣意書を作成の上寄付を募った。その結果、1935（昭和10）年6月26日、建碑除幕式・慰霊祭が東京青山斎場にて陸軍参謀本部主催で執り行われた。2年後の1937（昭和12）年6月27日、龍江省洮南の地に「殉難烈士之碑」が建立された。当時の写真で確認すると、碑の脇にはこじんまりとした廟が建てられている。碑の高さは10メートルの石柱である。碑足下四面に碑文が埋め込まれており、その一面の拓本が記念館に残っている。碑文は、中村震太郎が書生として入った入澤達吉東京帝国大学名誉教授の撰である。

その慰霊碑が8メートル四方の石造り台座、高さ2メートルの台座の上に据えられている。地面敷地はさらに15メートル四方と思われるくらいあり、敷地は石柱の柵で囲まれている。見るからに立派な慰霊碑である。



（たかはし・たけお：1946年新潟県生まれ、本会会員。10年前から満州開拓団の調査研究に取り組み、『新潟県満州開拓史』『満州開拓民悲史』『幻の松花部隊』などの著書出版）

# 藤原長作 方正



黒竜江省方正県に立つ、日本人入植者の共同墓地。1月上旬、気温は氷点下20度を下回り、一面の銀世界だった



藤原長作 (郭相 声さん提供)



1912~1998

## 稲作で日中の懸け橋

藤原長作 岩手県沢内村(現・西和賀町)生まれ。青年時代から寒冷地での稲作に取り組む、1955年、農水省などから「米作日本一」に表彰される。80年、農業視察団の一員として中国黒竜江省方正県を訪れたのをきっかけに、現地での稲作技術を指導。10年たると功績をたたえられ、90年には中国政府から「国際協力賞」を授けられた。

中国の「永都」と呼ばれる黒竜江省ハルビンから東に約2000キロの方正。一面に広がる雪原は秋になれば、黄金色の稲穂で埋め尽くされる。中国で「水稲王」と呼ばれた藤原長作が、1980年代に稲作技術を伝えたこの地は今、「中国で最も美味しいコメの産地」と知られる。

街中では、多くの商店の看板に中国語に加えて日本語の店名が併記されている。敗戦時、日本人入植者約5000人がこの地で非業の死を遂げた。生き残った子供ら約4000人が戦後も残留したこともあり、人口約26万の半数近くが日本での就労経験など、日本と何らかのかかわりを持つとされる。水田地帯のただ中に、「中日友好園林」と名付けられた公園がある。日本人入植者の共同墓地、残留孤児と呼ばれる入植者の子供を引き取った養父母を顕彰する石碑の隣に藤原の功績をたたえる記念碑がひっそりと立っていた。藤原は80年6月、日中友好協会が組織した農業視察団の一員とし



藤原長作の足跡を追った本を出版した郷土史研究家の郭相さん(左、方正県の自宅で)

て初めて方正を訪問した際、地元政府との座談会で突然、技術指導を申し出た。真意を図りかねる相手に、藤原はこう続けた。「報酬はいらない。日中友好の懸け橋として、実際の行動で中国人民へのしよく罪としたい。」この決意表明に、日中双方から感動の拍手が鳴り響いた。夏が短い寒冷地の方正では当時、モミの直まきなどの稲作が小規模で行われている程度だった。しかし、岩手県の寒村でコメ作りに取り組んだ藤原は「故郷と似た気候」とみて、岩手で確立した寒冷地の栽培法を持ち込んだ。81年のことだ。畑地で育苗し、大きな間隔で苗を植えるという手法だった。70歳近くにもなって、自ら田に下り、土を味見しながら肥料などを調整する姿に地元農民は奇異の目を向けた。しかし、数年のうちに「藤原式」の稲作は方正だけでなく黒竜江省全体へ広まった。藤原の指導のための訪中は計6回に及んだ。

### 生前の願いかなう

方正の郷土史研究家、郭相声さん(62)は昨年末、藤原の足跡を詳細に記録した「方正の藤原長作先生」を共著で出版した。尖閣諸島問題で日中関係の緊張が高まった時期とあって出版社探しに苦労したが、郭さんは「藤原氏は民間の専門家として指導に尽力した。我々も民間研究者としてその業績を伝える義務がある」と語る。東日本大震災の見舞いも兼ね、今年には藤原の故郷を訪問したいという。沢内村は80年代、方正から農業研修生を受け入れ、村の男性に嫁いで定住した女性も複数いる。73〜93年に沢内村村長を務めた太田祖電さん(91)は「長作さんの縁で、二つの農村は今もつながっている」と語る。

藤原の死から4年後の2002年、関係者の手で遺骨の一部が方正の日本人墓地に納められた。生前に繰り返し「方正に骨をうずめたい」との願いはかない、自らが伝えた稲作の営みを見守っている。

(文) 竹内誠一郎、写真 田村充

## 第5回近現代の歴史検証と北東アジアの未来を展望する―

### ―周恩来の国際主義的精神を噛みしめて―

#### ハルピン・方正、引揚の港・胡蘆島と周恩来鄧穎超記念館を訪ねる

今回は、「周恩来の国際主義的精神を噛みしめて」というタイトルの下、方正日本人公墓、731部隊罪証陳列館（残留孤児、中国人養父母に関する常設展）、残留日本人引き揚港の胡蘆島、天津では周恩来鄧穎超記念館を視察する。

日程	8月22日（木）	成田発（CA926）	15：15
		北京着	18：10
		北京発（CA1639）	20：25
		ハルピン着	22：20
	8月23日（金）	ハルピン 午前	731部隊罪証陳列館にて残留日本人孤児と中国養父母に関する常設展を視察
		午後 方正へ	方正県政府表敬訪問 革命烈士記念碑
	8月24日（土）	方正	日本語学校訪問と開拓団・残留孤児を研究する現地の方と交流
			方正及び麻山地区日本人公墓参拝 中国養父母公墓 藤原長作翁の碑
	8月25日（日）	ハルピン	9：28発（鉄道）～胡蘆島へ14：15着
			胡蘆島視察 日本人が引揚げ船埠頭 記念碑 引揚げ状況について中国側専門家から話を聞く
	8月26日（月）	胡蘆島	山海関見学
		午後	山海関：万里の長城の関門 天下第一関門 世界遺産の九門口水上 旧「満洲国」との国境の町
	8月27日（火）	胡蘆島北駅	10：23発 天津13：57着
		天津	周恩来鄧穎超記念館 古文化街
	8月28日（水）	天津	午前 天津より北京は
		北京	午後 昼食
		北京発	16：40（CA421）
		成田着	21：00

定員 25名（最少催行人員 15名）

費用 250,000円

申込み 7月20日まで。ご関心のある方は、詳細の日程、申込書などを送付します。  
下記までにお問い合わせください。

主催：社団法人日中科学技術文化センター、方正友好交流の会

連絡先：大類善啓 TEL:03-3295-0411 FAX:03-3295-0400

Email : ohru@jcst.or.jp

## ハルピン氷祭りの旅（2014）

### ■日程

1月29日（水）	新潟空港ロビーに集合	10:00
	空港発（CZ616便）	12:15
	ハルピン空港着	13:30
	宿泊＝シャングリラ（香格里拉）ホテル	
30日（木）	氷祭り参観	
	松花江メイン会場、太陽島会場	
	兆麟公園会場	
	宿泊＝シャングリラ（香格里拉）ホテル	
31日（金）	731部隊記念館見学	
	残留孤児養父母展示室訪問	
	宿泊＝シャングリラ（香格里拉）ホテル	
2月1日（土）	ハルピン市内観光、買物	
	宿泊＝シャングリラ（香格里拉）ホテル	
2日（日）	ハルピン空港発（CZ615便）	8:05
	新潟空港着	11:15
	空港ロビーで解散	

\*時間は現地時間、中国は日本の1時間遅れ

- 定員 15名
- 会費 150,000円（旅行保険代含む。なおシングルの宿泊ご希望の方は差額10,500円プラス。集合、解散の新潟空港までの交通費は含まれていません）
- 申し込み 1月10日までに下記奥村までお申し込みください。
- 会費の払い込み 振込用紙をお送りしますので1月15日までに指定の口座へお振込みください。

方正友好交流の会・ハルピン氷祭りツアー班

旅行の問い合わせ 奥村正雄

電話 043-272-9995

FAX 043-272-0214

## 方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの

### ——「方正友好交流の会」へのお誘い——

中国ハルビン市郊外の方正県に、日本人公墓が建立されているのをご存知でしょうか。1945年の敗戦のさなか、祖国を目指して逃げ惑った旧満洲の開拓団の人々は、難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々がこの方正の地で息絶えました。それから数年、累々たる白骨の山を見た残留婦人が骨を拾い集めました。そして力を貸した中国人たちが集めた遺骨はおよそ五千体ともいわれています。

その人たちを祀るお墓が「方正地区日本人公墓」です。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれ、公墓が建立されたのです。多くの日本人開拓団員等が犠牲となった旧満洲で建立されている公墓はこの方正にあるものだけです。(黒龍江省麻山地区でソ連軍の挟撃に遭い、四百数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も1984年に建立され、この方正の地にあります)

この公墓の存在は、残念ながら一部の関係者にしか知られていませんでした。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を多くの人々に知ってもらおう、そして維持管理の面でも日本が協力して活動していこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は1993年に設立され、2005年6月に再発足し、日中友好の原点の地ともいべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員 一口 1,000円 団体・法人会員 一口 10,000円

(口数は最低一口、上限はありません)

方正友好交流の会 事務局 (大類善啓)

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 (社) 日中科学技術文化センター内

電話 03-3295-0411 FAX 03-3295-0400 E-mail : ohrui@jcst.or.jp

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス : <http://www.houmasa.com/>

笑いに国境などない！

# 中国のお笑い

伝統話芸“相声”の魅力

とばりはるお 著  
戸張東夫



大修館書店  
あじあブックス073  
1800円(税別)

新  
中  
国  
書

い。しかし、その内容や歴史、現状を知る人は相当少ないはずだ。本書はそんな中国の漫才、というよりも落語であり漫談である中国のお笑いの話芸を余すことなく紹介してお

中国にも日本のような漫才があるといっても知らない人が多いだろう。中国によく行っている人なら「相声」と言われる漫才のようものがテレビで見ることがあるかもしれない

が、中国の伝統話芸である「相声」の魅力に会ったのは香港に滞在していた時だ。落語や漫才が好きで著者に、大陸から香港に移ってきた中国人の友人が、中国でも相声とい

国・台湾・香港の映画や大衆演芸の研究家でもある著者

り、本邦初と言ってもいい画期的な書だ。著者は読売新聞香港支局長などを歴任したジャーナリスト。お堅い政治だけでなく、中

驚いたのは文豪・老舎が相声の愛好家だっただけでなく、自ら相声を創作し、時に舞台にも立っていたと紹介されていることだ。長編小説『駱駝祥子』や戯曲『茶馆』などで中国を代表する大作家が相声をこよなく愛していた。本書の第2章〈文豪老舎と抗戦相

驚いたのは文豪・老舎が相声の愛好家だっただけでなく、自ら相声を創作し、時に舞台にも立っていたと紹介されていることだ。長編小説『駱駝祥子』や戯曲『茶馆』などで中国を代表する大作家が相声をこよなく愛していた。本書の第2章〈文豪老舎と抗戦相

生をはじめ、中国有数のお笑い芸人たちの悲喜もごももの人生と芸が濃やかに描写されている。

「で、誰の弟子だ？」と尋ねた。〈お笑い〉から見えてくる中国の素顔と、際どい小話も楽しむおらかな中国人の魅力をぜひ本書で知ってほしい。(大類善啓)

老舎人が楊に接見した。握手をした後、その老舎人は後ろにいた芸人に「彼は誰だ」と聞いた。楊だと答える

あふれる人間性を余すところなく描き出すとともに、現代中国社会が抱える複雑な一面をも描写している。いま中国で最も人気の相声芸人は郭徳綱だという。彼はかつての国家主席の楊尚昆もネタにしてしまう。ある

上記『中国のお笑い』書評拙文は、(公社)日本友好協会の旬刊新聞『日本と中国』に掲載したものである。この本のサブタイトルは「伝統話芸“相声”の魅力」、帯は「笑いに国境などない！」である。

前号『星火方正』15号に「垂水健一さんを偲ぶ」という原稿を書いた。文中には、垂水さんの後を継いで『日本と中国』の編集長になった経緯などを書いた。ところがこの号が出た後、諸般の事情で編集長を辞めることになった。私事であるがご報告しておきたい。

なお、『日本と中国』はこの6月から月刊になるとのことである。(大類善啓)

## 書籍案内

### \* 『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」－ハルビン市方正県物語－』

方正友好交流の会 編著

日本人公墓建立までの経緯などを王鳳山と奥村正雄が、中国養父母公墓を自力で建立した遠藤勇さんの半生を大副敬二郎が、方正県住民の家に住み込み、全力で稲作指導に邁進し「日中友好水稲王」といわれた藤原長作さんの一生と、敗戦後八路軍に入り帰国後、日中友好運動や麻山事件の犠牲者の公墓建立で活躍された金丸千尋さんの半生を大類善啓が執筆。また「方正友好交流の会」を成立以前から支えた人々の座談会を牧野史敬が司会進行した記録などが収録されている。 (定価 1500 円、残部僅少、事務局にあり)

### \* 『東京満蒙開拓団』

東京の満蒙開拓団を知る会・著

満蒙開拓団というと長野県や山形県などの農村からが多いということもあり、東京人には関係ないように思われがちだ。ところが東京からも満蒙開拓団があった。本書は、空白になっていた東京からの開拓団を追った本格的な研究書だ。日本全体で、満蒙開拓団と満蒙開拓青少年義勇軍合わせて約 32 万人が「満洲」へ渡ったが、そのうち、約 1 万 1 千人余りが東京から行ったという。2007 年から 5 年をかけて調査研究を重ねての成果がここにある。加藤聖文氏の「満蒙開拓団の歴史的背景」というわかりやすい解説が巻末にある。

(定価：1800 円＋税別、著者：今井英男、多田鉄男、藤村妙子。

発行：ゆまに書房 101-0047 東京都千代田区内神田 2-7-6

電話：03-5296-0491 FAX：03-5296-0493)

### \* 『戦場へ征く、戦場から還る－火野葦平、石川達三、榊山潤の描いた兵士』

かごしま たけし  
神子島 健 著

サブタイトルに登場する 3 人の作家たちが、日中戦争、十五年戦争に動員された兵士たちを描いた小説の分析を通して、兵隊になり、戦場に征くこと、そして還ってくることの意味と、そこにいる兵士たちの心の揺らぎなどを考察した 500 頁を超える大著だ。

戦争を知らない世代が圧倒的に増えている現在、現実の戦争はどのようなものだったのか、本書を読めば痛切にわかるだろう。

著者は東京大学大学院国際社会科学専攻の助手、気鋭の社会学者だ。昨年、本会が東大駒場で行った総会記念講演会ではいろいろ協力していただいた方でもある。

(定価：5460 円。発行：新曜社 101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10

電話：03-3264-4973 FAX：03-3239-2958)

## 《報告》

## ありがとうございました

前号の会報 15 号入稿後、2012 年 12 月 7 日以降からカンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。(敬称略、受付けた順に記載しました。2013 年 4 月 30 日現在)

武吉次朗 崎山ひろみ 篠原淳子 小玉正憲 竹井成範 北村栄 青柳幸司 土川克広  
山内良子 貞平浩 森田恭子 栗原貞子 前田光繁 田中丸邦彦 鷗沢弘 田沢仁 高田  
京子 小畑正子 高橋健男 渡部保雄 横沢活利 竹中一雄 永宮彌生 伊原忠・泰子  
澤田伶子 小松征夫 伊藤幸枝 野田尚道 松村静子 丹藤佳紀 小出公司 小関光二  
及川康年 石田和久 菅原三太郎 加藤重幸 小倉茂 高橋かよ子 山下美子 中島紀子  
山川梅子 石原健一 矢田博子 NPO 法人やまなみ 照山真木子 末広一郎 小林忠作  
宮田一郎 鳥島せい子 杉田春恵 玉置啓子 坂田和子 窪田かづよ 山岸隆夫 大島満  
吉 吉岡稔 小島正憲 篠田欽次 中澤道保 高木凉子 清水醇 牛山満智子 是洞三栄  
子 黒岩満喜 矢吹晋 網代正孝 鈴木秀年 城谷稔 長谷川照夫 毛利悦子 香坂優  
塩見雅正 篠原国雄 宮川龍二 寺岡浩三 山田敬三 山下くに 西沢昭裕 白西紳一郎  
金丸千尋 遠藤勇 名取敬和 神子島健 桜井博之 木戸富美江 山川禎一 長塚淑江  
堀江はつ 馬場信韶・弘子 岡崎雄兒 芹沢昇雄 新谷陽子 丸野公平 島辰夫 藤村光  
子 田代清一 齋藤實 高木昂 山本光夫 可児力一郎 宮下春男 松島赫子 南雲英雄  
柳瀬恒範 小松征夫 今村隆一 林郁 先崎千尋 南哲夫 園木宏志 岩間孝夫 川口憲  
中村ふじゑ 山極晃 宮原成太郎 田井光枝 大西広 穂苅甲子男 前川よしえ 金子彰  
木村美智子 藤原榮子 風間成孔 今井英男 趙エン 石橋実 矢島敬二 伊藤光子

## 《編集後記》

いつも 5 月発行の会報は、夏の訪中記がある 12 月発行の号ほどの厚さはない。しかし要は内容である。これからも、会報にふさわしいと思われる原稿をどしどしお寄せいただきたい。さて、ここにきて自民党議員による靖国神社への集団参拝である。なぜ集団で参拝するのか。「みんなで渡れば怖くない」と言った光景は、一人では何もできない人間の卑小さを表している。彼らは、日本の富国強兵政策と不可分に結びついた靖国神社建設の歴史を知っているのだろうか。先の戦争に心の底から望んで死んでいった人たちがどれだけいたのか想像したことがあるのか。英霊ではなく、いわば犬死のように死んでいった人たちである。仮にヒトラーが祭られている所があったとしよう。そこにドイツの国会議員たちが参拝したら、ナチに蹂躪されたユダヤ人やチェコ人、ポーランド人ら近隣の人々の気持ちはどうなのか考えたことがあるのか、本当に情けなくなってくる。(大類善啓)

《表紙写真 2010 年 6 月撮影 吉川雄作》

『星火方正～燎原の火は方正から～』(第 16 号) 2013 年 5 月 7 日発行

発行：方正友好交流の会 編集人：大類善啓 Email：ohrui@jcst.or.jp

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-6 日本分譲住宅会館 4F

(社)日中科学技術文化センター内 電話：03-3295-0411 FAX：03-3295-0400

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス：<http://www.houmasa.com/>

